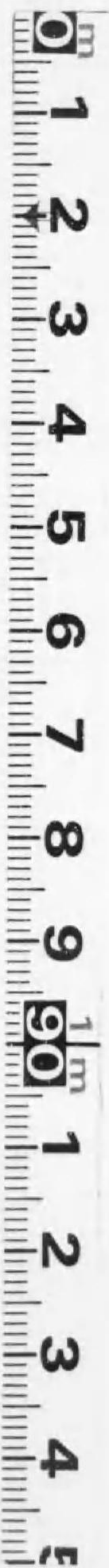


506
249



始



506-249

タンホイゼ
ル
ロオエ
ン
グ
リ
ン

ワ
グ
ネ
ル
作
中
島
清
譯

大正
11. 9. 23
内交



(年三八八一)ルネグワの前終臨

解 説

西洋の歌劇 (Musikdrama) —— 正確に云へば樂劇 —— の邦譯は困難でなく寧ろ殆ど不可能であつて、彼我國語の相違は斷じて同一の樂譜を用ふる事を許さないし、又用ふるも夫れに由つて近似の情調を出す事は到底望まれない。語の配置のほど同じ他の歐洲語に譯するのならば、その困難は普通文藝の翻譯に幾らもまさるわけではないけれども、又實際英佛語のワグネル物は同一樂譜で盛に通用してゐるらしいけれども、根本的に配置の法を異にする日本語の歌詞を歐洲樂譜に配して効果を擧げる事は、到底あり得可からざる事と私は思ふ。

尤も歌詞を日本語に譯すると共に、譜をも新たに作つてそれに嵌め、そして出來上つたものの情調が原作のそれと近似のものである事が出來るならば、さういふ方法に於ては或は泰西樂劇の邦譯が始めて可能でもあり得よう。併しさういふ事は音樂家としても詩人としてもワグネルの天才と同等な者が日本に生れて始めて期待さるべき事であつて、又さうなると決して單なる翻譯ではなく、寧ろ普通の創作以上のものであらう。

音樂に關しては全く何等の知識も持たない私が其様な事まで考へるのは、隨分の僭越に相違ないが、實際の所そんな事を考へてまでも私はワグネルの作を反芻したのである。原作を繰

り返し吟誦して味ふといふ譬は、時間的反芻の外に、更に日本語で味ひ度いといふ空間的反芻の慾が私には可なりに深いのである。それで今度私は敢て不可能の事をしてみた。樂譜成立の混沌境とでもいふ様なものを頭に持つて、それに由つてワグネル樂劇の歌詞を譯出してみた。不可能は何日になつても不可能であらうが、した事は亦飽く迄もした事である。

で今こゝでは彼の作中最も人口に膾炙してゐる『タンホイゼル』につき幾らかでも讀者に早く理解して貰ひ度いための譯者の注意を少々云ふ事にする。『タンホイゼル』は勸善懲惡といふ様な人生の實用的解決を明示若しくは暗示する作物とは正反對である。一體道徳と藝術との關係如何といふ様な事は、随分云ひ古された題目であるけれども、それが果して如何なる程度まで多くの人に理解されてゐるかといふ段になると、随分心細いものであり、道徳的感激と藝術的感激とを混同してゐる者は、所謂藝術家を以て自ら任じてゐる者の側にも決して少くはないのである。實は感激といふものは私の觀る所では皆藝術的なものであらねばならないから、所謂道徳的感激は畢竟低級な藝術的感激に過ぎないのであるけれども、さういふ階梯の高下級を混同するのだから堪らない。足と頭とを混同するのだから。共に人體の一部であるとは云へ。

道徳的感激の出發點或は歸着點は常に勸善懲惡であつて、勸善懲惡とは讀んで字の如く、根本的には何であるか恐らく永久に分らない筈の所謂善惡に對し解決の勸懲を下すのであるから、

その低級な事勿論であるが、併しそれは實用の標準によつてさういふ解決を下すので、夫れだけ廣く世人に迎へられるのは亦自明の事であり、勸善懲惡文學の名家たる我が瀧澤馬琴が長らく我が國の文學界に覇を唱してゐたのも亦怪しむを要しないのである。併し文學に對し藝術に對する考の大に進歩發達した現代の日本に於てさへも、實用を悦ぶ我々人間の心は矢張り勸懲の解決が何等かの方法によつてより、手近に與へられてゐるものをより多く迎へてゐる。馬琴の様な淺薄な勸善懲惡には望遠すると稱する者も、馬琴に少し毛が生え羽が生え近代的色調を帯びた様な勸善懲惡には可なり隨喜してゐるのが事實である。馬琴のは「惡人滅び善人榮ゆ、芽出度し芽出度し」といふ勸懲であつたが、今のは「惡人其物が改心し善人となる、芽出度し、芽出度し」なのである。勿論餘程の進歩が其間にあるのだからではある。但し人間の改心といふものが抑も人生の解決になるかどうか、これは餘程の疑問である。

しかし我が『タンホイゼル』はさうではない。實用的な解決などは微塵も『タンホイゼル』の中には見出されない。他の作即ち『ロオエングリン』や『トリストタンとイソルデ』などに於ても同様であるが、しかも『タンホイゼル』は特にさういふ嚴肅な無解決の藝術的悲痛（悲痛であると同時に誇である）を強調してゐるかの觀がある。だから私も抽象的にはあれ其次第を取分け力説するのである。勿論ワグネルとても實用的な勸善懲惡とでもいふ様な解決が又人生に必要な

事は知つてゐるのであるが、莫末も藝術をそんな實用の奴隷などにしてはならない事は、彼の尙ほより多く知つてゐる所である、痛感してゐる所なのである。そして『タンホイゼル』が少くとも私に常に嘖く所は、藝術とは永久の神聖な迷ひといふ事である。又抑もそれだからこそ藝術には無限の尊嚴があるのではなからうか。

『タンホイゼル』の主人公はエヌウス山といふ肉慾の歡樂境に入り、その支配者たる女王エヌウスの寵を恣にする。そしてそのエヌウスには不老不死などの魔術があつたり、普通の人の世では見られない濃艶な快樂を與ふる力があつたりするが、さういふ事は其歡樂に昂奮し陶酔してゐる者自身の糜爛的心情と見てもよい。併し所詮人間に過ぎないタンホイゼルは、どんなに甘美な強烈な肉慾の歡樂を與へられても、たゞ夫れだけでは何うしても居られなくなる。それを悪いとか罪だとか思ふのではないけれども、たゞもう堪らなくなる。そして後には寧ろ苦しみたい、死にたいといふ心になる。つひに洞窟を去りエヌウスを棄てて心に絶對の平和を求めに行く。その心の自然に赴く所は即ち靈性の愛の權化たるエリザベトである。エリザベト！ 其名を聞かされただけで彼は氷の様な尊い痙攣に 身を貫かれる。彼女の春も亦タンホイゼルと共に再び歸つて来る。ワルトブルクの音楽堂は再びタンホイゼルの美妙な調べとエリザベトの再生の花とを飾る事になる。

しかし其處に於ける戀愛讚美の競技で他の歌人等が索漠無味な戀愛觀を歌ふのに對し、タンホイゼルのそれは又おのづから次第に肉の匂ひの強烈なエヌウス山の激賞になる。さうなる^と他の連中は承知をしない。しないででもタンホイゼルは彌増しに自分の主張を強めて行く。はては皆は劍を抜いて彼を殺さうとする。彼は又それに少しもひるみもしない。しかし何と云つても多勢に無勢である。するとエリザベトは身を以て彼を庇ひ、彼の言葉の爲めに自分の心は寸斷寸斷になりながらも、彼の魂を救ひ度さに自分を捨て、彼の爲めに祈る。タンホイゼルは再び身も世もあられぬ悔恨の情に燃える。羅馬へ贖罪の旅に上る。

そんな風にタンホイゼルは靈と肉とに絶えず苛まれ、又もや彼方へ行き此方に戻り、輾轉反側して其懊惱の一生を終る。最後に牧師の手に持つステッキに芽が吹いて花が咲き、そして救はれるといふ事は、所謂荒唐無稽呼ばはりをする人々に取つては最も屈強な批の打ち所なのかも知れないけれど、それは畢竟「永久に無解決」といふ極度の悲痛に對する同情を持たない者の態度に外ならない。「無解決の解決」にして始めて詩であり藝術である。「解決の解決」は實用的道徳に過ぎない。

聖盃グラアルの傳説を取扱つた『ロオエングリン』には、また其傳説に従つた奇蹟や不思議が

幾らも出て来るが、もはやその辯明は不要とし、先づ詩としての『ロオエングリン』の題材に就いて云つてみると、それは至純至高の愛は絶対の信頼によつてのみ成り立つもので、若し其信頼に一點微塵の濁りをも生ずれば、はや愛はない、といふ思想である。神性は人性を愛し、人性は又神性に近づき昇らうと努めるけれども、即ち双方より相引き相求めるのであるけれども、その接觸はたゞの一瞬にして終るといふ悲劇なのである。

ブラバントの王女エルザ、父の歿後臣下のフリイドリヒ・テルラムンドの爲めに弟殺しの罪に訴へられ、無實の由を云ひ解くにすべなく、危急に迫つて純眞清浄な祈念の三昧に入り、何處からともなく白鳥の舟に曳かれて來た銀装まぶしい一人の騎士によつて、テルラムンドとの神前裁判に打勝つのである。同時に其騎士とエルザとは清純無比の相愛に入る。しかし其結婚の永久に幸福であるための條件として、騎士は自分の名や素性や身分等一切エルザに問ふなど云ふ。勿論エルザも心に微塵の不安を抱くでもない。そして二人の幸福は即ち地上に天國を出現さすべくなつて行く。併しはや其時敵テルラムンド夫婦の陰謀は、例へばイブに誘惑を囁いた蛇の様に、既にエルザの心に一點疑惑の念を挑發しておいたのである。疑惑とは云へ夫れは極めて無邪氣な、そして良人の爲めには何様な萬一の危急な場合にも身を捨てゝも愛の極みを注ぎ度いからの心より起る疑惑であるけれども、神の固い掟を守らなければならない騎士は、そ

れを聞いては悲痛で仕方がない。併し人間たるエルザの方では洩らされない秘密は尙ほと聞き度い。再三迫られて騎士は終に打明けける。彼は實に神祕の城モンサルワアトに安置されてある聖盃ゲラアル守護の國王バルシファルの子ロオエングリンなのである。併し既に自分の名や身分を明かしたからには、もはや彼は一刻もエルザと共に居る事はゲラアルの掟の許さない所である。蓋しさういふ高い身分である事を知つたからには、どんなに純潔な心の所有者たるエルザだと云つても、人間としてそれを以て他に對し少しなりとも誇る心にならない道理がなく、そして其誇りはそれだけ至純の愛その物を濁す所以なのである。ロオエングリンは自分も悲みエルザをも憐み、再び迎へに來た白鳥の舟に乗り惜々として別を告げる。エルザは云ふ迄もなく悔恨と悲嘆に暮れて失神の態であるが、彼を失ふ事になる全ブラバントの悲哀、全獨逸の痛嘆も、彼の心を動かさない事はない。彼は曩にテルラムンドの妻の咀によつて白鳥の姿に化せられてゐたエルザの弟ゴットフリイドを、咀を解いて獨逸の爲めに、又エルザの爲めに、ブラバントの領主たらしめる事にする。そして愈よ別れて行つてしまふのである。

この篇に就いては奇蹟や魔術などの様な傳説的事實に對する所謂荒唐無稽呼ばはり以外にはエルザに求むるロオエングリンの「信」といふものが餘りに過度で不自然ではないか、と云ふ非難のみが或は有れば有り得るかと思ふ。併し題材が既に人間性と神性との交渉である。(これは

ワグネル評傳の著者リヒャルト・ビュルクネル氏 || Richard Bulker || の言を俟つまでもない。) さういふ交渉を取扱ふ事が誤りだといふ様な妄論が許されない限り、神性に近づかんとする人間性がいつも一見些事に似て些事でない一簣の蹉きによつて、例外なしに永久の悲痛の世界に逆戻りをするといふ事は、云ふ迄もなく自然であり眞實である。タンホイゼルの様にエルザが懊惱の一生を終るといふ仕組みではないけれども、そして悪方たるテルラムンドやオルトルウドが滅亡するといふ事にはなつてゐるけれども、惡に對して到底完全の勝利を得る事の出來ない人間たるエルザの一生は、矢張り惡の彼等の誘惑を極めて受け容れ易い自分たる事を飽く迄も認めて苦しみ行かねばならないのである。そして其苦しみはなまなか一度清純無比な愛を経験した爲めに、それだけ愈よ痛切に彼女の魂を苛むわけである。ワグネル自身が『トリスタンとイゾルデ』を書いた後に於てさへ、この篇を自分の作中で最も悲劇的な詩だと云つてゐる事は、抑も何を意味してゐるであらうか。

なほ『タンホイゼル』と『ロオエングリン』には、構想上相似通へるものがある。それはワグネルと同年生れのヘッベルも好んで屢々なした様に、基督教的精神と異教的精神との相互に一步も退かぬ抗争若しくは對立を描く事で、畢竟それが悲劇を胚胎するのである。『タンホイゼル』

にあつてはエリザベトとエエヌウスとが即ち相敵對するその二者であり、『ロオエングリン』のエルザの身に取つてはロオエングリンと、イブの蛇の役目をつとめるオルトルウド(テルラムンドの妻)とがそれである事は讀者の直ぐ觀取する所であらう。そしてその抗争もしくは對立の意義の大きさは、別に私の絮説を要しない事であらうと思ふが、讀者に於て機會があつたならば他日なほヘッベルの同じ行き方と比較對照してみても、そこに此の二人の天才の優劣でなく時質を會得されん事を私は希望する。

譯者

小 註

『タンホイゼル』の部

- 一、**ナヤアデ**(Naiade)。ニンフニフ(Nymphe)の部類。その條を見よ。
- 二、**ジレエネ**(Sirene)。海洋中の島に居て、歌で航海者を誘惑し溺死させる處女としてホオマアに出てゐるのに基づく。後には處女の頭を持った鳥、人體を持った鳥などとしても描かれ、美と雄辯と歌謡と誘惑との象徴とさるゝに至つた。
- 三、**三人のクラアツィエ**(Die drei Grazie)。ユプター(Jupiter)の三人の娘で、アグラライア(Aglaja) || 光澤)、オイフロジイネ(Euphrosyne || 輕快)タリア(Thalia || 榮耀)の三女神であり、優美と愛嬌を代表すとされてゐる。又優美と愛嬌と温順の三徳をそれゝ配される事もある。
- 四、**アモレテン**(Amorelten)。愛の神アモル(Amor)の複數。エロス(Eros)とも云ひ、キューピット(Cupid)とも云ふ。弓矢を持った翼ある童形として描かれる。
- 五、**ニンフ**(Nymphe)。希臘神話に於ける地位の低い神々で、自然界の生活を人格化したものとされて居り、その森に棲むのをドリヤアデ(Dryade)又はハマドリヤアデ(Hamadrjade)と云ひ、山のをオレアアデ(Oreade)、泉、川、池等に居るのをナヤアデと云はれる。繪畫彫刻等では大抵裸體もしくは半裸體の年若い處女として表はされ、水鏡等を持つてゐるのが常である。

- 六、**バックンティン**(Bacchantin) 普通複数でバックンティンネン (Bacchantinnen) である。バックウス (Bacchus) = (酒の神、又大酒家) の女性の奉仕者、その男性はバックンテン (Bacchanten) である。バックウス祭りに放縱亂痴氣の限りを盡して練り歩く連中である。
- 七、**ザティイル**(Satyr) 脚は山羊で、頭に角を生やしてゐる山野の神、悪徳の表象とされて居り、その舌を出してゐるのは又罵詈雑言の意味とされて居る。酒と女が好きである。
- 八、**ファウン**(Faun) 古代羅馬の神話に於ける山野の神、はじめは家畜の爲めに狼の害を防いで呉れなどした好ましいものとされてゐたが、今は不品行な遊蕩漢の稱呼となつた。
- 九、**オイロオバ**(Europa) 希臘神話に於けるフェニツイニン王アゲノオルの娘で、最高の神ツォイスの爲めに牡牛の形になされ (或は此作に出てゐる通り牡牛の背に縛りつけられて、ともある) 海を渡つてクレタ(クリイト)島に連れ行かれ、そこでツォイスとの間にミノス、ラダマンティス、サルペドンの三神を産み、後アステリオス王を夫にする。
- 一〇、**レダ**(Leda) 希臘神話に於けるエトリエン王テステイオス (Thestios, König in Ätolien) の娘で、本當の夫との間に數子を生みたる外に、白鳥となつて忍んで來たツォイスとの間にペレナ及びポリドイケスを生んだ。

小 解	註
バックンティン	(1)
バックウス	(1)
バックンテン	(1)
ザティイル	(1)
ファウン	(1)
オイロオバ	(1)
レダ	(1)
ペレナ及びポリドイケス	(1)

タンホイゼ
ル
ロオエング
リン

中
島
清
譯

ワ
グ
ネ
ル
作

タンホイゼル (三幕物歌劇)

人物

ヘルマン (Hermann) テュウリンゲン (Türingen) の領主。

タンホイゼル (Tanhäuser)

ワルフラム・フォン・エッセンバッハ (Wolfram von Eschenbach)

ワルテル・フォン・デル・フォオゲルワイデ (Walter von der Vo-

gelweide)

ビテロルフ (Biterolf)

ハインリヒ・デル・シュライベル (Heinrich der Schreiber)

ラインマアル・フォン・ツエエテル (Reinmar von Zweter)

エリザベト (Elisabeth) 領主の姪。

エエヌウス (Venus)

若き一人の牧人。

四人の小姓。

テュウリ ゲンの騎士、侯伯、貴人等數人。上臈數人。

タンホイゼル

騎士にして歌人。

老若の巡禮者數人。

三人のグラーアツィエ。

少年數人。

ジレエネ、ナヤアデ、ニンファミ、アモレット、バックンティン等數人。

ザティール、ファウン等數人。

場所

テウリンゲン。ワルトブルク(Warburg)

時

十三世紀の初の頃。

古代日耳曼の女神ホルダ(Holda)は、慈愛深い温雅な女性として、その毎年國內を廻り歩く爲めに草木が榮え穀物や果實が豊かに出来るのだとされてゐた。が基督教が入つて来るに及び、ホルダもヲオダン其他の神々と運命を共にしなければならなくなり、他の神々と共に民間に深い信仰を得てゐた事とて其存在と奇蹟の力とをすつかり否定されるには至らなかつたが、併し他の神々と共に以前の様に福祉を齎らすといふ事は疑はれる様になり、或は却つて禍を持來すものに作り替へられたりした。ホルダは地下の洞穴に、山地の岩窟に追ひ込められ、其處から彼女の出て来る事は不祥事の出現とされ、彼女に隨從して来る者は亂暴狼藉な一隊の軍旅の如きものと見做さるゝに至つた。その後(下層の民間に於て自然に對し恵み深い温雅な彼女の營みを信ずる心は無意識に尙ほ生きてゐる傍ら)は彼女の名さへエヌウスのそれとなり、人を良からぬ肉體的歡樂に誘ひ陥れる妖魔としてのあらゆる觀念を結び附けられる事になつた。彼女の主として居を占めてゐた所はテウリンゲンではアイゼナハ東方のヘルゼルベルクの巖窟だとなつてゐて、其處がエヌウスの淫樂と驕奢の宮居であつた

といふのである。そして巖窟の外までも屢々賑やかな歡呼の樂は聞えたと云つてあるが、併し又魅力溢るゝ其響きは、心に既に激しい肉慾の憧れを持つてゐる者のみをしか誘惑はしなかつたのである。その憧れを持つてゐる者は切ない歡樂の響きに惹きつけられ導かれて、如何にしてとは知らず識らずはや其山の巖窟内に陥つてゐるのであつた。騎士にして歌人であつたタンホイゼル（神話としても又後世の觀察によつても、ワルトブルクの歌争ひに於けるハインリヒ・フォン・オフテルディングン = Heinrich von Ofterdingen = と同一）といふ者の傳説がある、それによるとタンホイゼルは其エエヌウス山に陥ちて、エエヌウスの許に滿一年を送つたのである。

第一幕

第一場

舞臺はエエヌウス山たるアイゼナハ東方のヘルゼルベルクの巖窟内を見せてゐる。廣い巖窟で、その後方は右の方へ曲つて見極められない。岩が鋸の齒の様に裂けてゐる所からは弱い日の光がさし込み、又縁を帯びた瀑が巖窟の高さ全部に沿うて落ち、石に碎けて盛に沫を飛ばしてゐる。水は瀑壺からずつと後方へ小川となつて走り、其處に湖を湛へ、湖には若干のナヤアデの泳いでゐる姿や、岸に寝たり坐つたりしてゐるジレエネの恰好などが見える。巖窟の左右には突兀々たる岩が突き出てゐて、それに珊瑚の様な不思議な熱帯性の植物などが幾らも生え繁つてゐる。左手の上の方へ延びた穴からは、柔かい薔薇色の光が流れ入り、その前即ち舞臺の前方にエエヌウスは贅澤華麗な臥床ヤレドに身を横たへ、エエヌウスの前にはタンホイゼルが頭は彼女の膝に載せ、堅琴は傍に置いて半ば跪マドづいてゐる。臥床の周圍には三人のガラアツイエが、婀娜つぽく手を取り合つたり腕を組み合はしたりして横はり、臥床の横と後ろには無數のアモレッテが、巫山戯ワシゲちらした揚句に疲れ

て眠つた子供の様に亂れ纏れて重り合つて雑魚寝をしてゐる。前方一帯は人を恍惚させる様な下からさしてゐる淡紅色の光に照らされ、白い水煙を散らしてゐる緑玉の色の瀑も、其爲めに鮮かに途切られてゐる。湖水の岸になつてゐるずつと後方は碧く澄んだ一種の靄に明るくなつて、月夜の様な情景である。——幕が開く時高く突出てゐる岩の上で酒を汲みかはしてゐた少年の數人は、ヤがてニンフェの群の手招きに應じて其方へ急いで下りて行く。ニンフェの群は水煙白い澤壺の圍りに陽氣な舞踏を始めたので、少年の群は其相手をしに行つたのである。二人づゝの組が出来るのもあれば、入り混るのもあり、探すのもあり逃げるのもある、擲楡ひ合つたり戯れたりして舞踏は次第に賑はつて來るのである。ずつと奥の方からバックンティンの一團が練つて來て、戀の舞踏の組の間を激しい歡樂に挑みつゝ動搖めき廻り、酩酊三昧の感激的な顔つき手つきをして、戀人達を次第に放膽無碍の遊蕩に誘ひ行く。ザティイルやファウンの群が又其處彼處の岩の間などから出て來て、バックンティンや戀人達の間に分け入り、ニンフェを追ひ廻したりして、混雜を愈よ大きくする。そして巖窟内全體の熱狂は其頂點に達するのである。すると其騒々しさに三人のグラアツイエは愕いて起き上り、熱狂の連中一同を制しようとし、退散させようとする。けれども力足らずグラアツイエ等自身が其渦中に引摺り込まれようとするので、彼女等は眠つてゐるアモレットの方に

つて揺り起し彼等を空に高く翔らせる。起された彼等是一群の鳥の様にばらばらと舞ひ上り、戦ひの陣を敷く様な恰好に上空一ぱいに位置を占め、其處から下の騷擾の巷へ雨霰と箭を射かける。愛の箭傷を受けた者は切ない戀の惱みに堪へかねて、熱狂の舞踏より退つて深い疲れの淵に沈む。それを打負かした三人のグラアツイエは酩酊の年若い男女の群を二人づゝにして、軟かい温かい力で舞臺の奥の方へ退散させる事に努める。バックンティンの群、ファウンの群、ザティイルの群、ニンフェや少年の群、一部は上空よりのアモレットの群に驅り立てられもして、散り散りばらばらに逃げて行く。淡紅色の靄は次第に濃く密に立罩め、先づアモレットの群が其裡に消え、次に背景一體が隠れてしまひ、後にはエエヌウスとタンホイゼルの外には三人のグラアツイエだけが見える事になる。彼女等は前方へ歩いて來て、妙に優しく手を組み合ひつゝエエヌウスの前に近づき、エエヌウスの領國內の臣下等の放縱度なき熱狂を取鎮めた由を報告するかの姿である。——エエヌウスは感謝するらしく彼女等を見る。舞臺後方の濃密な靄は四散し、オイロオバ誘拐の姿が霧の形に見える、草花を多く飾られた白い牡牛の背に載せられて、トゥリトオンとネレイデに導かれつゝ青海を渡つて行く所なのである。

ジレエネの合唱（姿は見えない）

來給へ、岸に、

來給へ、陸に、

然ゆる思の

腕に抱かれ、

歡喜の熱に身を浸し、

満足させよ、その愛慾を。

蔷薇色の霧は再び立ち罩め、オイロオバの姿隠れ、三人のグラアツイエは一種の優雅な舞ひを舞つて、今のオイロオバの姿の秘密深い意味を戀の或る仕草として解き示す。霧は又四散する。柔かい月明の下にして森中の池の汀にレエダが手足も延び延びとして坐つてゐるのが見える。白鳥が一羽彼女の方へ遊いで来て、その首を彼女の胸に甘える様に媚びる様に隠す。

ジレエネの合唱

來給へ、岸に、

來給へ、陸に

レエダの姿も次第に薄れ消え行く。つひに霧はすっかり霽れて、巖窟の全部が、ひつそりと靜かに寂しく現はれる。三人のグラアツイエは、ちらりと横目使ひをしながら笑みを含みつゝエエヌウスに禮をして自分達の愛の洞穴の方へと徐かに行く。深い靜寂。變らないでゐるのはエエヌウスとタンホイゼルの姿である。

第二場

エエヌウス。タンホイゼル

（タンホイゼルは夢の覺めた様にはつとして頭を擡げる。——エエヌウスは媚び親しみつゝ彼を又引き寄せる。——タンホイゼルは夢の姿を確と握らうと希ふかの様に片手を又の目の上にかざす。）

エエヌウス（極めて平靜に）

戀人よ、仰しやいな、どこに今あなたの心はお在りなの？

タンホイゼル（速く）

あんまりです、あんまりの快樂です。（次第に徐々に又低く）お、いまわたしは目が覺

めたのか

エエヌウス (靜かに穩かに媚びつゝ)

仰しやいな、何を氣にして居らしつて?

タンホイゼル

夢に見ましたのは丁度、――

それは私の耳には斯うも長らく他所事となつて居たのか、――

丁度嬉しい鐘の音を聞いた様な心地がしました。

おゝ、さても、如何に長らく鐘の音を私は聞かずに居たのでせう?

エエヌウス (前と同じく)

何に心を取られてますの? 何をぼんやり思つてますの?

(手を舉げて彼の額を軟かに撫でる)

タンホイゼル (戀愛の心)

此處に私が居た年月、どれだけだらう、

計りも出来ない。日月もはや私には

無くなりました、日輪もはや見ず、

空に優しい諸々の星も見なくなりました。

瑞々しくも緑して新たな夏を連れて来る

草の莖をもはや見ず、

春を告げ来る鶯の聲をも聞かず。――

さても私はもはや彼等を聞く事はないのだらうか、見る事は決してないのだらうか?

エエヌウス (穩かに訝りつゝ)

まあ、何を私は聞くのだらう、何てくだらないよまひ言なのだらう。

あなたの爲めに私の戀がしてあげる此のめでたい

奇蹟にあなたはもうはや倦み疲れて?

それとも神である事をあなたは悔ゆる? そんなに切に?

今かう悦ぶ身となつては、昔の惱み苦しみは

もはやすつかりお忘れになつて?――

(立上り)

起きなさいまし、我が歌人。そしてあなたの豎琴をお取りなさいな。

一六

(自分で彼の豎琴を取り彼の前にさし出す。)

戀を讃へて下さいな、それを見事に讃へ歌つて

戀の女神を御自分の所有とさへしたあなたぢやないの？

戀を讃へて下さいな、その最高の寵愛はあなたの所有となつたのだもの。

タンホイゼル

(急に意を決して奮ひ立ち、豎琴を取り、肅としてエエヌウスの前に讃美の姿勢を構へ)

あなたの爲めに響け、此の讃美。幸福な私に

あなたの力が見せて呉れた

此の奇蹟よ、讃へられてあれ。

あなたの寵愛より出た快樂の甘美さよ、

高き歡呼の聲となれ、わが歌。

悦びを追うて我胸、あゝ、類なき享樂を追うて我胸、

憧れて行つた。我官能は渴いた、喘いだ。

嘗てはあなたがたゞ神々のみに與へた恵みをば

死ぬる運命の人間の私に呉れました。――

併し死ぬる運命、あゝ、私は矢つ張りそれなんです。

そしてあなたの戀は私には餘りに大きい。

神だつたら永久に快樂に浸つても居られるでせう、

私は事物の有爲轉變に従ふ運命。

私の心にあるものは快樂のみではありません、

悦びの裡より私は悲しみの方へと憧れてゐます。

あなたの國より私は逃れねばなりません、

あゝ、女王よ、女神よ、私を行かして下さい。

エエヌウス

(夢より覺めたかの様に)

何を私は聞くのだらう？ 何て歌だらう！

何といふ悲しい調子に落ちましたの、あなたの歌はさ？

快樂の歌ばかりこそ促した筈の

タンホイゼル

一七

あの感激は何處へ行つて？

何なの、それは？ 私の戀のどういふ點が微温でしたの？
戀人よ、どうしてあなたは私に嘆き訴へるの？

タンホイゼル

感謝します、あなたの寵愛に、あなたの戀は讚美されてあれ。

あなたの傍に居た者は永久に幸福です、

あなたに抱かれ暖かい愛慾を交へ、神の情けの焰をば

共に味うた者は羨まるべきです、永久に。

あなたの國の奇蹟は歡喜に充ち、

あらゆる快樂の魅力を私は爰に吸つてゐる。

廣い地上に比ぶべきもの又とはない、

世間にあるもの、あなたに取つては何であらう。

しかし私は薔薇色の霧の此處より、

行きたいのです、微風わたる森の方へ、

我等の國の青空の澄みたる方へ、

我等の國の野の緑したたる方へ、

我等の國の諸鳥の愛らしい歌ある方へ、

我等の國の鐘の音の懐しくも響く方へ。——

あなたの國より私は逃れねばなりません、

おゝ、女王よ、女神よ、私を行かして下さり。

エエヌウス (臥床より跳り上り)

不實者、あゝ辛い。何を私に聞かせるの？

私の戀をよくもあなたは嘲るのね？

口では讚めて、そして其身は逃げて行かうと思ふのね？

私の魅力はもうあなたには澤山なの？

タンホイゼル

あゝ、美しい女神よ、怒らないでゐて下さり。

エエヌウス

タンホイゼル

私の魅力はもうあなたには澤山なの？

タンホイゼル

餘りに大きいあなたの魅力、それを私は逃れるのです。

エエヌウス

まあ、氣の毒な。裏切人、偽善者、恩知らず。

私はあなたを歸しはしないわ、あなたは此處より行けやしないわ。

タンホイゼル

永久にあなたより逃れて行かねばならない今よりも

より大きなより眞實な私の戀はまだ一度もありませんでした。

(エエヌウスは一種の叫び聲を上げ、両手に顔を被ひて彼方へ向く。長い間沈黙。エエヌウスは再びタンホイゼルの視線を求め、それから急に誘惑の微笑を浮べて又彼の方へ向きかへる。彼女の合圖に應じて其指した方に迷はしの洞穴が現はれる)

エエヌウス (低い聲で又話しかける)

來らつしやい、戀人よ、御覽なさいな、あの洞穴を、

薔薇色の霧がこめて軟らかに漂うてゐるわ。

彼處にあれば神の身にさへ又とない

甘美の極の樂しみが與へられてよ。

此上なく軟い褥の上に身を休めるがいゝわ、

そしてあなたの身の節々の痛みはすべて消えて行け、

あなたの熱してゐる頭を風は涼しく冷ましてやれ、

歡樂の焰はあなたの胸に湧いて漲れ。

(タンホイゼルを柔かに掻き抱き引き寄せようとしつゝ)

來らつしやい、戀しい戀の友達、さあ、彼方へ、ねえ。

ジレエネの合唱 (姿は見えない)

來給へ、岸に。

エエヌウス

幽妙な遠い方から響き來る歌の調べも

あなたを深く抱きしめて可愛ゆる様に促すのよ。

タンホイゼル

神の美酒、私の唇より、私の眼より啜るがいゝわ、そしてあなたの頬には輝くがいゝ、戀の感謝。——

二人の仲には歡樂の宴がなくてはいけないね、

戀の祭りをやりませう、さあ悦びに。

それに躊躇と恐怖の犠牲を捧げてはいけないことよ。

戀の女神と契りを交し、溺れよ耽れ、歡樂に、思ふがまゝの娛みに。

二なき友達、これで如何、仰しやいな戀人、まだ逃れようと考へて？

タンホイゼル (感激に驅られ又もや豎琴を手にする)

たゞあなたに、たゞあなたにのみ、我歌よ、絶えず響け、

私はたゞあなたをのみ讃へて行く、高く、高く。

あなたの強い魅力が一切の美の源泉だ、

あらゆる美妙な奇蹟は悉くあなたが元。

私の胸にあなたが注ぎ入れた熱よ、火よ、

焰となつて燃えるがいゝ、たゞあなたの爲めのみに。

さうだ、私は今日より全世界を敵としても、

あなたの爲めに戦はう、猛く雄々しく、倦まず挫まず。

しかし私は人の世へ行かねばならない、

あなたの傍では私はたゞ奴隷に過ぎない。

私は自由が慕はしい、

自由へ、自由へ、そこが私はなつかしい。

戦ひにこそ私は行かう、

死も滅亡もあらばあれ、——

だから私はあなたの國より逃れねばならない。

おゝ、女王よ、女神よ、私を行かして下さい。

エエヌウス (激しい憤怒に驅られる)

行くがいゝわ、心の昏んだ人、行くがいゝ、行くがいゝ、

行くがいゝ、裏切人をどうして私引止めよう。

逃げるがいゝわ、思ふまゝに。——逃げるがいゝわ、心の昏んだ人。

お願ひ通りの運命に落ちて行くがよい、行くがよい、行くがよい、——
 冷い人の群へ行くがよい、
 そんな人間達の愚鈍な陰氣な心には、
 歡喜の神の私達は眞平御免だわ、
 暖い地の懷へ私達こそ逃げて行くわ。
 行くがよい、心の昏んだ人、行つてお探し、その幸福を、
 その幸福をお探しよ、——そして探し當てる氣遣なしさ。
 以前に自分が笑つてやつた人達に、
 勝誇つて嘲つてやつた人達に、
 今度はお慈悲を下しいと縋るがよいわ、
 自分が賤しみはてた國に憐れを乞ひに行くがよいわ。
 そして耻をば曝すがよい、
 笑つた人達に笑はれてみるがよい。
 咀はれて、追放されて、まあ、何といふ態でせう、

頂垂れ萎れて又私の許へ……ふん、その態が今からありありと目に見えるわ。

——『以前其方に微笑みかけた

女神を再び探すがいゝや。

快樂の門を女神は又

其方に開けて呉れるだらう。』とね。

どうだらう、鬨の上に打倒れ、

横はつてる人のさまは、

以前は其處で其男にはたゞ歡樂があつたのさ。

今は戀でなく憐みを

乞食の様に乞ふのだとさ。

行くがよい、汚らわしいわ、乞食なんか。下郎なんぞを一寸でも
 私の國が入れるものか、入れるのはたゞますらをだけよ。

タンホイゼル

いや、その御心配は御無用です、私には自負心がある、

無耻厚顔にあなたの許へ戻りはしない。

今日あなたより別れ行く此の私は、女神よ、決して、決してあなたの許に歸つては來ません。

エエヌス (叫びをあげる)

まあ、決して歸つて來ないんだつて。――

何と私は云つたのだらう？

まあ、この人は何と云つたのだらう？……

決して歸つて來ないんだつて！……

そんな事、私何と思つたらいいのだらう？

何と解していいのだらう？……

我が戀人が私を永久に捨てて行く？……

(暖かき心になり、躊躇しながら)

戀人を責めずに許す筈の楽しみを

私自身で奪ひ去つた此の過ちは

どうして私に來たのか知ら、

どうして私こんな事と思つてゐたらう。

戀の女王に、

一切の幸福の女神に、

友を慰める事だけが

許されないであるだらうか。――

邊りも暫く寂りなつた位、

誇りかなあなたの歌に聞きしれて

微笑の目には涙さへ流し

憧れ酔うてた日もあつたわ。

嘗てあなたの訴へを聞き、あなたの魂の

嘆きを私が身に受けて、

それでも私が無感無覺であつた日の

あるとでもあなたに思はれて？

あなたに抱かれて得たばかりの慰めをば
安價に思はしてはいけないわ、
私があげた慰めも、貶^{おとし}しめてはいけないわ。

(絶望に驅られ)

あなたが歸つて来ないなら、
全世界に咀^くひよかれ、
そして女神の居なくなつた世は
荒れはてゝあれ、永久に。

(絶望的哀願)

あゝ、歸つて、ねえ、歸つて！
私の情けに頼^{たよ}つて、ねえ、私の戀に！

タンホイゼル

あなたより別れて行く此の私は、女神よ、
一切の情けに離れて行くのです、永久に。

エエヌウス

私の方へ再びあなたの心が惹かれる時、
それを自負心で抑へ止めない様に、ねえ。

タンホイゼル

私の憧憬は戦ひへ、
愛慾と快樂は私はもはや願はない。
あゝ、女神、此の心あなたには分つて貰へないかなあ。
私が行くのは死の方へです、死をこそ私は
求めて行くのです、たゞ死の方へ。

エエヌウス

死その物があなたを避けるわ、その時はお歸りなさいな、
墳墓自身があなたを拒むわ、その時はお歸りなさいな。

タンホイゼル

死も墳墓も私は身内に持つてゐる。

タンホイゼル

悔いと償ひ、それで私は私の安息を見出します。

エエヌウス

決してあなたに安息はありはしないわ、
決してあなたに平和はありはしないわ。
歸つてらつしやい、私の許に、
そしてあなたの幸福を得るがいわ。

タンホイゼル

愛慾と快樂の女神、

いや、あなたには、あゝ、安息も平和も私は見出さなう。
私の幸福の所在はマリア。

(エエヌウス、姿見えぬ。舞臺は急に一變する。)

第三場

タンホイゼル。若い一人の牧人。巡禮の群。

(タンホイゼルは其場を去らないであるが、急にとある美しい谷の中に居る事になる。空は青々と晴れ、日は輝やかに照つてゐる。——右手後方にはワルトブルク見え、谷の峽より左手を望めばヘヨルゼルベルクである。——右手、谷の傾斜面の中程には一條の山徑がワルトブルクの方から舞臺の前面の方へ来て、其處から脇へ曲つてゐる。そこには又聖母の像が安置してあつて、稍低い山の突角が其處に達してゐる。——左手の小高い丘の方から、家畜の頸の鈴の音が聞え来る。高い山の鼻に一人の牧人が牧笛シヤルマイを持つて谷の方へ向いて坐つてゐる。)

牧

人

(シヤルマイ牧笛を吹き鳴らす)

ホルダの姫は山を出て、
野越え森こえ廻り來た。
好き音たのしや、我が耳に、

タンホイゼル

眺めやりたや、わしが目で。

(又牧笛を吹く)

楽しい夢をわしは見た、

さて目をあける匂々に、

日は暖かに輝いて、

時は五月よ、五月となつた。

わしは嬉しく牧笛を吹く、

時は五月よ、楽しい五月。

(彼は、牧笛を吹き鳴らす。年老いし巡禮の群ワルトブルクの方より山徑を此方へ近づき來つ
つ歌ふ聲聞える)

年老いし巡禮の群

君が方へぞ我は行く、わが救ひ主、基督よ。

巡禮人の念願の頼みの的の基督よ。

我等は讚へん、美しき清き處女の聖マリア、

御恵みをば垂れ給へ、憐み給へ、廻國に。

(巡禮達の歌を聞いた牧人は笛を中途にやめ、信心深げに謹聴する)

あゝ、罪の重荷のさても苦しさを、

もはや此上堪へがたし。

されば憩ひも安らひも我は求めず、

選ぶは疲れ、又苦しみ。

神の御恵み御情の崇き祭の場に行き、

畏れ度み我が罪を償はむとぞ思ふなる。

信心堅き人の子に幸は降りて、償ひに、

悔いに赦され救はれん。

牧

人 (巡禮達が向合ひの丘の上に来た時、帽を脱いで振りつゝ高く呼び
かける)

無事で行かしやれ、羅馬の旅路。

俺の貧しい魂のお祈り上げて下されよ。

タンホイゼル

タンホイゼル (舞臺の中程に、地に根が生えた様にちつととして佇立してゐた彼は、烈しい感激に打たれ、倒れる様にどろりと跪まづく)

全能の神よ、受け給へ、此の讚美。
大なるかな、御慈悲の此の奇蹟。

(巡禮の一行は左手の聖母の像の傍を過ぎて、山徑を曲り舞臺より遠ざかり行く。牧人も牧笛シヤルマイを持つて丘の上より右手へ去る。家畜の鈴の音次第に遠くなり行く)

巡禮の群

君が方へぞ我は行く、わが救ひ主、基督よ。

巡禮人の念願の頼みの的の基督よ。

我等は讚へん、美しき清き處女の聖マリア、

御恵みをば垂れ給へ、憐み給へ、廻國に。

(そして巡禮の群は全く舞臺より去る)

タンホイゼル (心の底よりの痛切な祈禱を捧げる姿、跪づいて)

あゝ、罪の重荷のさても苦しきよ、

もはや此上堪へがたし。

されば憩ひも安息も我は求めず、

選ぶは疲れ、又苦しみ。

(涙に噎んで夫れ以上云ふ事が出来ない。地にすり附ける位に頭を垂れ、血を絞る様に泣いてゐるらしい)

巡禮の群 (はやずつと遠くなつてゐる)

神の御恵みみ情けの崇き祭の場に行き、

畏れ度み我が罪を償はむとぞ思ふなる。

信心堅き人の子に幸は降りて、償ひに、

(舞臺のずつと奥の方、アイゼナハの方向から、鐘の音が遠く／＼響いて来る、それは又、獵角を吹き鳴らす音が次第に近くなるまゝに薄れて行く。左手の山の方より獵の紛まじり装をしたテウリンゲンの領主と歌人の一團が森の道を踏んで登場)

第四場

タンホイゼル。領主。歌人の群。

領主 (山の半腹よりタンホイゼルを見やり)

誰だ、彼處に跪づいて、切ない祈禱に沈んで居るは。

ワルテル

罪償ひの者でせう。

ビテロルフ

武夫らしい扮装だなあ。

ワルフラム (先づタンホイゼルの方へ急ぎ行き、確かにそれと見分けて)

やあ、彼だ。

歌人の群

*ハインリヒ！ ハインリヒ！

*タンホイゼルに呼びかけるのである。ハインリヒとは男子に對する美稱、我古代の「いらつこ」彦などの類。但し我國のは語尾のみの様になつてゐる。

本當か、さても？

(タンホイゼルははつとして起き上り、己に復つて氣を鎮め、領主を始め歌人一同をちらと見やつてから、黙つて領主に禮をする)

領主

まつたく其方か。昂然として

蔑しき捨てた群に又歸つて來たのか。

ビテロルフ

語れ、どういふ意味だ、君が我等に歸つて來たのは？

歌人一同 (ワルフラムを除く)

語れ、話せ。

ビテロルフ

仲直りか、それとも戦のし直しか？

ワルテル

友人として歸つたのか、但しは敵としてなのか？

タンホイゼル

歌人一同 (ラルフラムを除き)

敵としてか?

ラルフラム

問ふな、友達。これが昂然たる様子だらうか? (タンホイゼルの前に行き)
挨拶をするよ、勇敢な歌人の君、
長いこと君は我々の群から缺けてゐたのだね。

ワルテル

好う歸つて呉れたねえ、平和で歸つて來たのなら。

ビテロルフ

挨拶をするよ、我々を友人と云ふのなら。

歌人一同 (ラルフラムを除き)

挨拶をする、挨拶をする、君に挨拶をするよ。

領主

それでは私も歓迎する。

でもまあ何處に今迄も居たのだね?

タンホイゼル

ずつと遠くへ行きました、——

休憩も安息も決して決して無い國へです。

聞かずに下さい。戦ふために私は戻つたではありません。——

仲直りをしませうよ、——そして私をなほと行かして貰ひます。

領主

否、いけない。そなたは新規に我等の一人になつたのだ。

ワルテル

君は行つてはいかぬ。

ビテロルフ

我等は君を行かせはしない。

領主、歌人一同 (ビテロルフを除く)

我々と一緒に居り給へ、ねえ。

タンホイゼル

タンホイゼル

行かして呉れ。居つてもおれは無駄なのだ、おれは一寸も立止つて休めない。
おれの道はおれをたゞ向うへと急がせる許りだ、
おれは一寸も後振り返るわけにも行かない。

領主、歌人一同

行くなと云ふにさ。我々と一緒に居給へよ、
我等は君を行かせはしない。

我等を尋ねて戻つた君ではないか、どうして斯様に、
逢つて間もなく行くといふのだ？

タンホイゼル（身を振り放す様にして）

行くのだ、行くのだ。

歌人一同

此處に居給へ、居給へ。

フルフラム（タンホイゼルの正面に立塞がり高い聲で）

エリザベエトの居られる處にさ。

タンホイゼル

（電氣に打たれたかの様に激しくはつとして悦びの色が強く現は
れる、催眠にかゝつた様に凝と佇立して）

エリザベエト！……あゝ、天の力だ、

又とない美しい其名を君は云つたのか。

フルフラム

その名を云つたとて、おれを敵とは罵るな——。（領主に向つて）

この友人の幸福を

私が此友人に告げる事を許して下さい。

領主

その友人が人の心を抑へた魔力を云ふがよい。

そして神が其友人に道徳を持たして下さるやう、

その魔力を祓ひのけるやう、武士らしくなる様に。

フルフラム

タンホイゼル

君が大膽な歌で我々と戦つた時、

又勝ち誇つて我々の歌に逆らひ歌つた時、

又我々の技巧に打負けた時、

その時しかし君だけが榮譽を得たのだ。

節操高いあの姫が思ひ惱んで

君の歌をば戀ひ慕ひ、身も魂たましひも奪はれて

憧れた程の奇蹟をば君が見せたは、

あれは魔法であつたのか、それとも純な力か、

あゝ君が昂然として我等を捨てて行つてから、

我等の歌にはあの姫の胸は開けず、我々は

姫の頬の色褪せて行くのを見る許り、

姫は我等を避けて許り居られたのだ。

あゝ歸つて居たまへ、勇敢な歌人、

君が歌をば我等のより遠ざからせる事勿れ。

今日以後の宴會は姫も缺かさず見えるやう、
彼女の星が我々の上に新たに輝くやう。

歌人一同

同僚となれ、ハインリヒ、昔の友になり給へ。

心違ひも争論も疾うに終つて過ぎてあれ。

我等が歌は共々に一つ心の音に響け、

今日以來我々を兄弟として呼んでくれ。

領主

歸つて居たまへ、勇敢な歌人の其方。

心違ひも争論も疾うに終つて過ぎてあれ。

タンホイゼル

(激しく感動して身をアルファムの腕に投げかけ、それから歌人
残らずに順々に切實な挨拶を述べ、領主の前に進んで心の底よ
り感謝に堪へない様子で禮をする)

姫の許へ行き度い、行き度い、連れて行つて呉れ。

タンホイゼル

あゝ今おれは再び夫れと見分けるのか、
自分で棄てた美しい世界なのだな。

天はおれをば見おろして居り、

野は豊麗に輝いて居る。

千の美妙の音を連れて我が魂の

奥へと春は歡呼して入つて行くのだ。

切なく湧いて溢れ来る甘美の思、高らかに、

おれの心は呼んでゐる、姫の處へ、處へと。

(その間に領主の獵隊の全部は鷹匠等をも混へて次第と舞臺に集つて来る。獵師等は獵角を吹き鳴らす)

領主、歌人一同

我等の失くしてゐたものが歸つて來たぞ。

奇蹟が歸つて來させたのだ。

彼の倨傲を追ひのけた

美妙の力に讚美あれ。

二人の

我等の

聞け又更に、

誰が胸からも響き出でよ

歡喜の命漲つて調子も高い歌の節。

(絶えずますます集り来る獵隊に、今は谷一ぱらよくしてゐる。領主と歌人一同は獵隊の方へ向き直り、領主は自分の獵角を吹き鳴らす。獵角の高い反響と獵犬等の吠聲がそれに答へる。領主と歌人一同が自分達の爲めにワルトブルクから曳いて來て貰つた馬に乗らうとする所で幕が下りる)

第二幕

第一場

ワルトブルクの歌樂堂。後方には城内の一部と谷が自由に見渡される。

エリザベエト（嬉しきうにいそくして登場）

懐かしい歌樂堂よ、又もや私はお前に挨拶します。

私の親愛な廣間よ、私は嬉しい、お前に挨拶します。

お前の内であの人の歌が目覺め、

陰鬱な眠りから私を起してくれる。

あの人がお前を出て行つてからは

お前は私にどんなに淋しく思はれたらう。

私は平和を失つたわ、

悦びは私を棄てゝ行つてしまつたわ。

私の胸が今悦びに漲る様に、

今はお前も堂々と氣高く私に思はれる。

お前と私を斯うも新たに生かして呉れるあの人は、

もう此の上遠さかつてはゐないのよ。

私は挨拶をするわ、挨拶をするわ、

なつかしい歌樂堂よ、お前に私は挨拶をする。

（タンホイゼル、ヨルフラムに導かれて彼と共に舞臺後方の階段より登場）

第二場

エリザベエト。タンホイゼル。ヨルフラム。

ヨルフラム

姫はあすこだ。——憚りなく傍に行き給へ。

（と云つてヨルフラムは後方の壁に凭れかゝる）

タンホイゼル

あゝ、姫君。

タンホイゼル (エリザベエトの足許に激しく身を投げ伏せる)

四八

エリザベエト (どきまぎして)
まあ。お立ちなさいな。放して下さいまし。

あなたに私こゝでお目にかゝつてはいけませんのよ。(離れて行かうとする身振)

タンホイゼル

いゝのです。こゝに居て下さい、そして

あなたの足許に私を跪かしておいて下さい。

エリザベエト (懐しげに彼の方へ向いて)

ではお立ちなさいましな。

此處にあなたが膝をおつきになつてはいけませんわ、こゝはあなたの王國ですもの。あゝお立ちなさいな。

歸つて来てくださいましたお禮を私申します。何處に斯うまで長らく逗留なさいまし

て？

タンホイゼル (徐々に身を起しつゝ)

此處よりずつと

遠い國です。昨日と今日の間には

深い濃い忘却の幕が下りました。

一切の思ひ出が矢の様に速く消え去つてしまひました。

たゞ一つ私が思ひ出せるのは、

もはや決してあなたに挨拶しやうなどと、

又いつかお目にかゝらうなどとは思つてもみなかつたといふ事です。

エリザベエト

それでは何うしてお歸りなさる事になつて？

タンホイゼル

それは奇蹟でした。

不可思議な尊い奇蹟でした。

タンホイゼル

四九

エリザベト (嬉しきにいそ／＼して)

その奇蹟、私の心の

底の底より讚美するわ。

(わ／＼する思を自分で制し、どぎまぎしながら)

許して下さい、私何を云ひ出すのやら、自分でも分らないのですもの。

私は夢を見てるのよ、そして子供より馬鹿ですよ。

奇蹟の力のするまゝに私はなつてゐますのよ。

もうはや私自分で自分分りませんの、どうぞ私に手傳つて、

心の謎の解けるやう力を添へて下さいまし。――

以前は歌人の方々の巧みな調べを

私も好きでそりやよく聞いて居ましたわ。

あの方々の吟詠も又讚嘆も

私はめでたい技と思つて居ましたの。

だのに私の此の胸にあなたの歌は

何て不思議な新らしい生命を吹き入れて下さいましたの。

あなたの歌に私の身は痛む位ゐに打慄へさうになつたり、

それかと思ふと箭の様に愉快が身内につき入つたりして、

私生れてはじめての感じでしたわ。

些とも知らなかつた憧れを覚えましたわ。

以前に美しいと思つたのも、そのまだ名さへ

知らない愉快に出逢つては何處へか消えてしまひましたの。

そしてあなたが私共を捨てて行つておしまひなさいましてからは、

心の平和も楽しみも私には失くなつてしまひました。

ほかの歌人の方々の歌の調べも私には

無意味になつてしまひました。

夢にも怖い悲しみを覚える許り、

覺めては胸も結ばれて狂ほしくなり、

悦びは私の心を見捨てました。

ハインリヒ様、ハインリヒ様、あなたは何を私になさいました？

タンホイゼル (感激して)

あなたは戀の神をこそ讃へなければなりません。
私の琴線を鳴らしたのは戀の神、
私の調べを借りたのは戀の神、
その導きによつて私はあなたの傍に來たのです。

エリザベト

讚美しませう、今日の日を、
讚美しませう、此の力を、
あなたの傍で斯うまでに
嬉しい事が聞かれうとは。
快樂の光に包まれて、
日も輝いて笑ひかけ、
新たな蘇生、悦びは

私の所有になりました。

タンホイゼル

讚美しませう、今日の日を、
讚美しませう、此の力を、
あなたの口より斯うまでに
嬉しい事が聞かれうとは。
新たに知つた此の生に
私は臆せず身を捧げる、
歡喜の痙攣に、此の美しい
無上の奇蹟、私の所有になりました。

ヨルフラム (後方で)

私の私かに望んでゐた思の影は
それで消え行く、消えて行け。その新生に恵みあれ。

(タンホイゼルはエリザベトより離れ、ヨルフラムの前に行つて激しく掻き抱き、二
タンホイゼル
五三)

人共々に階段を降りて退場。エリザベトは濡縁よりタルホイゼルを見送る。

五四

第三場

エリザベト。領主。

(側面の戸の一つより領主入り来る。エリザベトは走り迎へ、自分の顔を彼の胸に隠す)

領主

今こゝでお前に會ふのかね、此の樂堂には長いことお前は來なかつたではないか。我等が催す歌人の宴がやつとお前の心を惹く様になつたのかね。

エリザベト

私の伯父さま、あゝ情け深い伯父様。

領主

お前の胸を。

やつと私に打ちあけねばならない事になつたのか。

エリザベト

私の目を見て下さいまし。お話する事は出来ませんわ。

領主

まだ少しの間お前のその

嬉しい祕密を云はないでお置き。

お前が魔力を拂ひ除け得る様になるまでは、

その魔力を中絶させず置くがよい。――

さうだよ。歌があんな不思議を呼び起し

振ひ立たした真相は、今日公然と分る筈。

そして其完成の冠が捧げられる筈だ。

めでたい技が今日事實になるわけだ。

(ずつと奥の方、城内の廣場でらしい、喇叭の音が響き来る)

はや國內の貴人達、招きに應じ、

タンホイゼル

五五

この又とない祝宴にやつて来るのだ。
以前になかつた大勢だ、それはお前が
此の祝宴の主宰だと皆が聞いてゐるからだ。

第四場

領主。エリザベエト。歌人一同。侯伯。騎士。上臈達各數人。

(領主とエリザベエトは濡縁に出て、集り来る客人等を見る。四人の小姓が入り來つて客人等の到着の名を一々告げる、そして領主の云ひ附けに従つて客人等をそれ／＼宜しく迎へ請ずる。侯伯騎士等めい／＼又小姓や其他の供を從へて登場、其小姓や供は舞臺の後方に控へる。領主とエリザベエトは客人達を迎へ挨拶をする)

合唱

この高尚な樂堂に我等は悦び挨拶する、
此處にはいつも藝術と平和とだけが棲みてあれ、

めでたい聲が永久に響け、
テウリンゲンの君、

領主ヘルマンの君萬歳と。

(集つて來た客人等一同、皆請ぜられた席に着いて大きい半圓を描く。領主とエリザベエトは前方に來て天蓋の下に席を取る。——喇叭の吹奏。——歌人一同登場、客人の方に向つて嚴肅に騎士らしく挨拶の籠つた禮をする、それから自分達の爲めに定められてゐる、やゝ小なる内部の半圓の空席に着く。タンホイゼルは右に、ヨルフラムは反對な左に、客人等と向ひ合つて位置を取る)

領主(立上つて)

親愛なる歌人諸君よ、諸君は既に此の樂堂で、
實に多くの美しい歌を歌はれたのである、
聰い謎でも快話な歌でも諸君は我々の
心を共に暖かに娛まして呉れました。
獨逸の國威の爲めに我々が身命を捧げ、
劍で戦ひ血潮を流し、

兇惡なエルフェに抗し、

言語道斷な軋轢を防いでゐた時、

それに劣らぬ功績は諸君によつて擧げられた。

溫雅な心と美しい風儀と、

道義と、清い信仰の爲め、

諸君は諸君の技によつて

高尚な立派な勝利を得られたのです。

今日は我等に又祝宴の企てなり、

我等が長らく不本意ながら失つてゐた

勇敢な歌人が歸つてそれに臨むのです。

彼を再び我等の群に歸らしたのは

不思議な祕密の爲業と私には思はれる。

その祕密を諸君は歌の技によつて我等に示して貰ひ度い、

それで私は諸君に今、問題を出します、

諸君は戀の本質を何と闡明出来ますか。

その出来る人に、それを最も價値多く歌へる人に、

エリザベエトは賞美を呈上するのです。

そして其の賞美は受賞者の望むまゝです、どれほど大きく高くともよい、

エリザベエトが必ずそれを呈上する様、私が世話はするのです。

立たれよ、歌人、めいめい樂器を取られるがよい、

題はきまつた、その賞の爲め戦はれるがよい、

そして前以て我々の感謝を受けて貰ひます。

(喇叭吹奏)

騎士、上萬達の合唱

萬歳、萬歳、テウリンゲンの領主萬歳。

めでたい藝術の保護者萬歳、萬々歳。

(一同着席。四人の小姓進み出て、歌人の一人々々より其名を書いた小さい紙片の巻いたのを黄金杯に受けて集め廻り、それから其杯をエリザベエトに捧げる、エリザベエトは其中の紙片の一

つを取り、又それを小姓等に渡す。小姓等はそれを讀み、嚴肅な態度で場の中程に進み出て呼ばはる。

四人の小姓

歌ひ始めはヲルフラム・フォン・エッセンバッハの君である。

(そして四人の小姓は領主とエリザベトの足許に坐る。――ヲルフラム立上る。タンホイゼルは恍惚とした夢想の様で自分の豎琴に靠れかゝり居る)

ヲルフラム

この崇高な皆様の會合を私は見渡せば

この高雅な有様に私の心は熱して來る。

斯程多勢の武士の方々、皆勇敢に獨逸的に、又賢明に、

宛ら堂々たる柏の森です、壯麗であり、清新であり、緑も深い。

又婦人方を見れば皆溫雅に貞淑に、

匂ひも高い愛す可き無數の花の花環です。

見るに心も恍惚と酔ひを覺えて、

(*獨逸的と云ふ事は愛では隱直公明と云ふ副意味をも持つてゐる。)

斯様な優美溫藉の光の前には黙します、私の歌は。

私は眩しい大空に懸つて輝く

星の一つを眺めやるに、私の精神は

どんなに離れてゐやうとも自づと引締まり、

魂は敬虔の念に満ちて祈禱の三昧境に入るのです。

そしてね、皆さん、不思議の泉が私に現はれ、

それを私の精神は驚嘆の目を睜つて眺め、

それより無比の恩寵の悅樂を汲み、

私の心はその悅樂に又なく生々するのです。

私は決して其泉を濁さうとは思ひません、

良からぬ心で掻きまぜやうとは思ひません、

禮拜しつゝ犠牲として此身を捧げたいのです、

私の心の最後の血も其爲めには悦んで流さうと思ひます。

貴人の方々、今述べました言葉によつて、

戀の至純な本質の私の意見を讀んで下さい。

六二

(そして彼は着席する)

騎士、上藤達の合唱 (賛同と感激の態)

その通り。その通りだわ。本當にめでたいあなたの歌。

(タンホイゼルは夢から覺めた様には、つとして身を起す。その反抗的の様子には直ぐ又歡喜の昂奮が現はれ、彼は氣もわく／＼するらしく前方を凝視する。覺えず知らず豎琴の絃を探す彼の手の微かな慄へ、口許に浮んだ凄しい微笑の影、それは共に彼が又他の魔力に驅られた事を現はす。それから彼は屹と、自分に復つたかの様に力づいて、うんと手を差延べて豎琴をおつ取つた恰好は、もはや自分の何處に居るかをも知らず、又エリザベトにも氣附かない態度であつた)

タンホイゼル

おゝ、フルフラム、君はそんなに歌ふのか、

それは戀をば劣悪なものになすといふものだ。

そんなに君が疲れ弱つて心配するなら、

多分此世は乾からびてしまつてるのだな――。

神の讚美に高遠な方へと云ふなら、

天をば仰げ、天にある星をば仰げ、

あんな不思議を君達は捕へるわけには行かないから、

たゞ祈念をば捧げるがよい。

だが觸れるべく身を屈めるものには、

心も官能もおれに近く横へるものには、

同じ血や肉で出来上つて軟かな形をして

おれに媚びなづんで絡みついて來る者には、――

おれはぐんぐん寄つて行く、快樂の泉の元へ寄つて行く。

躊躇はそこには決してない、

泉は涸れる事がなく、おれの愛慾は

消え去る事が決してない、

おれの渴望が永久に燃えると共に

おれは永久その泉で生氣をつける、――。

タンホイゼル

六三

分つたかね、ユルフラム、戀の真相は、

その本質は斯うなんだ、かうおれは見るのだ。

(一同驚愕の態。エリザベトは魅せられ引附けられる心持と、恐れ疎んずる心持とを自分の胸で戦はしてゐる)

ピテロルフ (憤然として立上る)

さあ来い、我等みんなで戦はう。

君の言葉を聞いて、誰が黙つてゐるものか。

君の倨傲が望むとならば、聞け、無頼漢、

おれも君に云つて聞かさう。

おれは高潔な戀に感激する時は、

勇氣が振ひ起つて武器を鍛へる、

戀が永久に辱しめられない爲めには

昂然としておれの最後の血を流すのだ。

婦人の名譽の爲め、崇高な道義のため、

おれは騎士として此劍で戦ふ。

だが君の青春に歡樂をもたらすものは

安價なものだ、戦ひの値打はありはしない。

騎士、上萬達の合唱 (熱狂的に賛同する)

ピテロルフ萬歳。

騎士の群

我等の劍は爰にある。

タンホイゼル (いよく、威丈高になり熱烈に)

ほお、おめでたい大布呂敷のピテロルフ。

君が戀をば歌ふのか、狼武士のピテロルフ!

勿論おれに享樂の値打あるものが何であるか、

君に分りつこはないさ。

貧弱黨の旗頭、何を享樂したのだい。

君の生涯に戀などはありはしない、

悦びとして君が絞り出したものは、

それこそ實際戦ひの相手とする値打はありはしない。

騎士の群 (激昂して騒ぎ出す)

云はせて居けば限がない。あのふてぶてしさを止めてやれ。

領 主 (劍を抜いたピテロルフに向つて)

劍は納め給へ。平和を保つてゐなければならぬ、歌人諸君。

(ヲルフラム立ち上る、同時に一同又静かになる)

ヲルフラム

おゝ天上の靈よ、私は切に請ひ願ふ、

私の歌を容れよ、これわが賞。

私をして此の高潔な集會中より罪惡の

追放されて行くのを見せしめよ。

天使の様に美しく

我が魂たましひに入りて行く

高潔な愛よ、わが歌は

御身に響け、感激に充ちて。

御身は神の使者として降り來り、

私は従ふ、美妙優雅な遠方より、

御身は人の世に來り、

御身の星は永久に其處に輝く。

タンホイゼル (躍り上る、夢中になつてゐる)

戀の女神よ、我歌はあなたの爲めに鳴り響け、

私は今あなたを讃へる、高く、高く。

あなたの強い魅力が一切の美の源泉だ、

あらゆる美妙な奇蹟は悉くあなたが元。

情熱に燃えてあなたを強く抱きしめた者こそ、

たゞ其者こそ戀の何たるかをば知る。

憐れな者共、かつて彼女の戀愛を味はつた事なき者共よ、

タンホイゼル

行け、行け、エエヌウス山エヌウスに行つてみる。

(一同大に驚き、騒ぎ出す)

一 同 (エリザベエト以外)

何だと、この人非人。誰も傍そばには行かぬがよい。

聞いたか、人々。あの男エエヌウス山エヌウスに居つたとさ。

上 藤 達

逃げるわ、逃げるわ、あの傍そばは。

(女達は皆非常に愕き怖れ、強い嫉忌の様子をして音楽堂を去る。歌人達の争ひを心配を募らして聞いてゐたエリザベエトだけは一人残る。——眞着まろな顔をして、全身の力を籠めて、天蓋を支へてゐる柱の一つに寄り沿うて轟ずつと立つてゐる。——領主、騎士、歌人一同は各自の席を離れて一所に固かたまる。——タンホイゼルはずつと左方の端れに、なほ暫しの間は有頂天な歡喜の態度で居る)

領主、騎士、歌人一同

聞いたか、あれを。臆面もなく彼の口は
ど、え、ら、い、所業を白状したのだ、

あいつは地獄の快樂を味つて來たんだな、
エエヌウス山に居たんだな。

怖ろしいわい、忌々しいわい、咀はしいわい。
あいつの血を塗らなきやならんぞ、此の劍に、
あんな男は破門して地獄の池へ
追ひやるがよい、叩きやるがよい。

(一同劍を引抜いてタンホイゼルに迫る、タンホイゼルは對抗の構へをする、エリザベエト間に
割り入る)

エリザベエト

お控へなさい。

(一同非常に愕き、片唾を飯む)

領主、騎士、歌人一同

何だと? 何と? どうしたと? エリザベエト。
純潔な處女が此の罪人を蔽かばふのだと?

タンホイゼル

エリザベエト (タンホイゼルを身を以て被ひながら)

お退りなさい。でなければ私は命は惜みません。

此の人より私が受けた死の様な痛みに比べれば、
あなた方の剣に突かれる位が私に何でありませう。

領主、騎士、歌人一同

エリザベエト様

それはまあ何といふ事ですだ。

エリザベエト、

あなたの心は何うしてさうも昏んだのですだ、

そなたの

あなたを斯うも無慙むざんに裏切つた此男の
そなたを免して貰う様願ふなどは？

罰を免して貰う様願ふなどは？

エリザベエト

私の事でありますものか。でも此人は、——此人の幸福は——。

それを皆さんは此人より奪ひ取らうとなさりますか。

領主、騎士、歌人一同

あらゆる希望を其男は罵り棄て

たのです、
たのだ、

決して決して其男に幸福の來やうが
ありはしません。
ありはしない。

天の咀ひが其男には當つた
のです。
のだ。

(と云つて一同は又タンホイゼルに斬りかゝらうとする)
その罪と一緒に其男失せるがよいわい。

エリザベエト

お退りなさい。あなた方が此人の裁判官ではありはしないわ。
怖ろしい。そんな亂暴な剣はお棄てなさい。

純潔な少女の言葉をお聞きなさい。

タンホイゼル

私によつて神の御心をお聞きなさい。

怖ろしく強い魔の力に捕はれてゐる

此の不幸な人は此の世にあつて

悔い改めと贖ひをしても幸福は

決して得られないでせうか？ え、さうでせうか？

純潔な信仰を固く持つてゐる皆さんは

最高の建言を取違へやうとなさいますか。

此罪人の希望を皆さんは奪はうとなさるならば、

皆さんに此人が何をなしたか、それを仰しやい。

私を御覧なさいまし、處女の私の花を此人は、

荒らゝかに突き破つてしまひましたの、――

深く心に愛してゐた戀してゐた私を、

その私の心を此人は勝誇つて裂き破つてしまひましたの。

私は此人の爲めに願ひます、此人の命の爲めに願ひます、
悔い改めに贖ひに此人がどうぞ向きますやう。
新たに信仰の力がどうぞ此人に與へられますやう、
嘗て世の救ひの主は此人の爲めにも悩んで下さいましたもの。

タンホイゼル

(自分の愛慾の歡喜の昂奮と反抗の熱とより次第に冷め來り、沈

み來り、エリザベエトの辯護の言葉に又激しく感動して、今迄と

反對な切ない悔恨の情に襲はれる)

あゝ、不幸な、不幸極まる此のおれだなあ。

領主、歌人一同

(次第に激昂を鎮め、感動しつゝ)

朗らかな天の皎氣の中より天使が一人

神の尊い教へをば告げに來たのだ。

仰いで見い、穢らはしい裏切人。

自身の惡業を思つてみい。

其方は彼女に死を與へ、彼女は其方の爲めに命乞ひをしてゐるのだ。

天使の願ひを聞く者が、どうして粗暴で居られよう。
自分は此の悪人を赦し度くはなくつても、
天の言葉に何うして逆ひが出来やうぞ。

騎士一同の合唱

仰いで見い、穢らはしい裏切人。

彼女を仰いで見るがよい。

其方は彼女に死を與へ、彼女は其方の爲めに命乞ひをしてゐるのだ。
天使の願ひを聞く者が、どうして粗暴で居られやう。

自分は此悪人を赦し度くはなくつても、

天使の言葉に何うして逆ひが出来やうぞ。

タンホイゼル

罪ある者を幸福へ連れて行くやう、

神の使ひが此のおれに降つて來たのだな。

だが、あゝ、しかし、おれは穢れた心で其人に

觸らうと思つて罪惡の目で其人を見たではないか。

あゝ此の大地の隅々をも見渡して上に高くまします聖マリア、

私の幸福の天使を送つて下さつた聖マリア、

私を憐れんで下さい、あゝこれ程に罪に穢れて、

天の遣はし女の人に思ひ違ひをした私、

憐れんで下さい、此の私を憐れんで下さい。

あゝ、どうぞ憐れんで下さい。

領主、歌人、騎士一同

自分は此悪人を赦し度くはなくつても、

天の言葉に何うして逆ひが出来やうぞ。

エリザベト

私は此方の爲めに願ひます、此方の命の爲めに願ひます。

新たな信仰の力がどうぞ此方に與へられますやう、

嘗て世の救ひの主は此方の爲めにも惱んで下さいましたもの。

恐ろしい罪惡が行はれたのだ、

咀ひを受けてる罪の子が我々の許に

偽善の假面をかぶつて忍んで來たのだ。

我等は其方を追放する、我等の許に其方は

居てはならない。我等の家は其方の

爲めに穢れた、大空さへも其方を餘りに長く入れてゐた

此の家根を脅かしつゝ見おろしてゐる。

だが永遠の破滅より救はれる道が其方に

公然と一條はある、余は其方を追ひやりつゝも、

その道は教へてやる、それを辿つて其方の幸福を求めて行くがよい、

我が領内の方々より罪贖ひの巡禮達

大勢寄り集つて來てゐるのだ。

年老いたのははや先きに曲つて行つたが、

若い一群はまだ谷に休憩してゐる。

彼等の罪はまだ軽いが、

それでも彼等に安い心はないのである、

罪贖ひの敬虔な念に驅られて

羅馬をさして大慈悲の祭の場へ行くのである。

領主、歌人、騎士一同

彼等と共に其方も

慈悲の都へ行くがよい、

身を投げ伏してひたすらに、

其處で贖罪するがよい。

神の審きを云ひ渡す牧師の前に

低頭平身するがよい、

併し牧師の祝福を得ない限りは、

歸つて來るな、決して、決して。

我等の復讐は天使に遮られたからは、それは其方を避けねばならない。若し其方が罪惡と汚辱を主張するならば、我等の劍は其方を刺さねばやまない。

エリザベト

慈悲恩寵の大神よ、此の罪人を
行かして下さい、おん傍に。
斯うまで切に平伏して祈れる人に
罪の責めをば咎めをば許してやつて下さいまし。
私の願はそれ許り、此方の爲めそれ許り、
その祈りこそ私の生命。
おん光をばこの方に見せて下さい、
この方が常夜の國に行かね前。
私は悦びに打慄へて

犠牲を捧げたくござります、

お取り下さい、あゝ何卒お取り下さい、この命もはやこれは私の命でもありません。

タンホイゼル

どうして私に大慈悲が授かるでせう？
どうして私の罪惡が贖へませう？
我が幸福は消え去つて行くのが見えた、
私は天の寵愛に逃げて行かれた。
それでも私は廻國に行き度い、罪の贖ひに、
心の責苦に此胸も張り裂けるがよい、
大地に此身も投げ伏して、心ゆくまで苛みたい。
悔い嘆かひの苦痛こそ今は此身の心遣り。
あゝ、たゞ併しあの人にだけでも赦しを得度いものだ、
此身の難澁の天使たるあの人にだけでも、

あれほど罵詈を受けながら私の爲めに犠牲となつて呉れた人にだけなりと。

年若き巡禮の群の歌聲 (谷から響き来る様に、舞臺後方の下の方より)

神の御恵み御情の崇き祭の場に行き、

畏れ度み我罪を贖はむとぞ思ふなる。

(一同の顔つき様子漫ろに自ら緩和される。エリザベトはなほ一度迫つて來た者共に對して更にタンホイゼルを蔽ふ様に身構へする、それから彼等を年若い巡禮の群の歌に懲戒的に注意させる。——悔恨の情に身も世もあられず身悶えしてゐたタンホイゼルは急にひたりと靜かになり、巡禮の群の歌に耳を傾ける)

年若き巡禮の群の歌

信心堅き人の子に幸は下りて、償ひに、
悔いに赦され救はれむ。

タンホイゼル

(電氣を感じた様にはつと希望の光に輝く、そして身は痙攣する様に烈しくエリザベトの足許に投げ伏せ、彼女の服の裾に燒

け着く様な切ない接吻をする、それから激しい感動に酔ひ痴れた様になつて跳り上り、次の通り叫ぶと共に發足する)

羅馬へこそは。(急ぎ出て行く)

一同 (タンホイゼルに後ろより叫びかける)

羅馬へこそは。

(幕速く落つ)

第三幕

前奏 (タンホイゼルの巡禮行)

(ワルトブルクの前の谷、左手にヘッルゼルベルクが見えて、すべて第一幕の後半部の舞臺拵へ、たゞ秋の景色に變つてゐる。日ははや夕方となる。——右の方の小さい山の突出部には聖マリア像の前にエリザベトが跪ひざまづいて祈禱に餘念もない。樹の繁つた左方の山よりヲルフラム下り來る。エリザベトを見て中腹に立止る)

第一場

エリザベト、ヲルフラム。年老いし巡禮の群。

ヲルフラム

果して姫は又爰で祈禱を上げて居られるのだなあ。

おれが繁つた山から寂しく一人此谷へ

下りてさまよひ來る毎に、必ず屹度逢つたものだ。

彼より受けた死を胸に

抱いて切ない悶々に身を投げ伏せて、

日も夜も彼の幸福を姫は願つてゐられるのだ。——

おゝ、聖なる愛の永久の力よ。

巡禮群の羅馬より歸るを姫は待つてゐる。

はや木の葉は落ちて人々の歸りは近くなつて來た。

慈悲に浴した人達と彼も一緒に歸るか知らず？

姫の問はこれである、姫の願ひはこれである、——

聖者の方々、かなへてやつて下さい、その願ひ。

姫の受けた胸の傷、まだ癒えないであるならば、——

あゝ、その痛み、せめて軽くしてやつて下さい。

(それから尙ほ谷の下の方へ行かうとして、巡禮群の歌聲を耳にし、又立止る)

年老しい巡禮群の合唱 (ずつと遠い方から次第に少しづつ近くなつて来る)

あゝ故郷よ、今はわれ神に幸得て汝を見ん、
 挨拶をせん、悦びて、汝が愛らしき野に原に、
 今は休めん旅の杖、
 神慮のまゝに度みて巡禮したる我なれば。

エリザベト (右の歌に耳を傾けつゝ立ち上る)

あれがあの人々の歌なのよ、——あれが歸郷の人々よ。
 職務を今は私に、聖者の方々、
 お授け下さい、よく爲し遂げてみませうに。

フルフラム

巡禮達だ。——あの敬神な歌振りは

受けた大慈の幸福を告げ知らせるのだ。

おゝ、天上の靈よ、姫の生命の決定的な今である、
 強くしてやつて下さい、姫の心を。

年老しい巡禮群の合唱 (次第に舞臺に近づいて来る)

悔い改めに贖ひに我身は神に赦されぬ、

我が此胸の畏みて仕へ奉れる大神に、

我が悔恨に祝福を恵み給へる大神に、

響け我歌、大神に、捧げ奉らん大神に。

(爰で巡禮群は舞臺の右方より登場、前方に進み來り、次の歌を歌ふ間に山の突出部の前を徐々と横ぎり、谷に沿うて後部の方へ行く)

贖ひ人に大慈悲の幸こそ授けられにけれ、

かくて宛ら天上の平和の國へ辿るなり、

死も地獄も怖るゝに足らず、それ故、かくて我

生ある間大神を讃へて行かん、大神を。

(此の時はや舞臺の後方に向つて、次第に遠ざかりつゝある)

讃へまつらん、永久に、

讃へまつらん、永久に。

(ますます遠ざかり、つひに谷の出口より右手の方へ消える)

八六

エリザベエト (高くなつてゐる自分の位置から、通り過ぎ行く巡禮の群中にタ

ンホイゼルは混つてゐないかと氣を張り詰めて物色してゐた彼

女は、悲痛らしい併し静かな態度で)

あの人は歸つて來ない、――

年老いし巡禮の群の合唱

あゝ故郷よ、今はわれ、神に幸得て汝を見ん、
挨拶をせむ、悦びて、汝が愛らしき野に原に、
今は休めん、旅の杖……

(歌の聲も次第に消えて行く。――日は沈む)

エリザベエト (又とない肅とした態度で跪つき)

全能の聖マリア様、私の願をお聞き下さい。

讚美的のあなた様、私はあなたに呼びかけます。

私は御前で絶え入り度いと思ひます。

おゝ、大地より私をお取り下さいまし、

天使の様に純潔で私があなたの天國へ

行かれますよう、して下さいまし。

若しも愚かな狂氣に驅られて私の心が

いつかあなたに背きでも致しませうなら、

若しも罪ある慾情が、此世の望みが

いつか私に萌してもしませうならば、

私はどんな苦しみに逢ひませうとも、身を賣めて

心の中のそんなもの必ず殺して終ひます。――

それでも私あらゆる悪を滅ぼす事が出來ないでしたら、

それでは何卒憐れと思召し私にお手傳ひ下さいまし、

御心に適ふ下婢として、畏れつゝしみ、

タンホイゼル

八七

お傍へ参られます様、

あの人の爲めに大慈悲の

御恵みをば 糞 ぶ事の出来ませう。

(少しの間祈禱三昧の餘り茫とした様にして居たが、それから徐ろに立上ると、彼女はヲルフラムが目につく、ヲルフラムは何か話しかける爲めらしく彼女の方に近づいて來るのであつた。——彼女は自分にはどうぞ話しかけて呉れるなといふ身振をする。)

ヲルフラム

姫君、私はお供をする事出来ないでせうか？

(エリザベトは又更に身振と顔つきで次の意味を示す、即ち自分はヲルフラムに感謝する、その誠實な愛には心の底より禮を云ひ度い、併し自分の道は天へ行つてゐる、自分はそれを辿つて天に行つて、そこで自分の崇高な職務を盡さねばならないのだから、自分は連れられて其處へ行つてはいけない、又従つて來てもらふのもいけない、と。そして彼女は山を半分許り登り、ワルトブルクの方へ通つてゐる小徑を辿つて次第に向うへ消えて行くが、その行く姿は尙ほ暫くの間は見られる。——それを暫く見送つてゐたヲルフラムは、左手の谷の小丘の裾に腰打かけ、豎琴

を弾きはじめる)

第二場

ヲルフラム

黄昏は死を豫知させるかの様に大地を蔽ひ、

谷は黒い衣ころもに包まれてゐる。

大空へ憧れわたる魂たまごみに、夜よると怖れを

搔き分け昇る魂に、おれは心が休まない。

お前は照るか、愛すべき第一の星、

その柔かな光をば遠くの方へ送るのか、

その愛らしい輝きは軟らげるのか、夜よの闇を、

そしてお前は谷を出る道を示して呉れるのだ。

お、お前、私の優美な夕づゝよ、

タンホイゼル

私はいつも悦んでお前に挨拶をしてゐる。

姫がお前の前を通るなら、嘗て一度も

姫に二心ふしんを持たなかつた此の胸の爲めに挨拶をしてお呉れ、——
浄土の天使となるために姫が此世の

谷を離れて天がけり飛び行くなれば其挨拶をしてお呉れ。

(豎琴を尙ほ奏でながら、空を仰いで立止まつてゐる)

九〇

第三場

フルフラム。タンホイゼル。後にエエヌウス。領主。歌人一同。騎士一同。年老いし、又年若き巡禮の群。

(すつかり夜になつてゐる。タンホイゼル登場。ぼろ／＼になつた巡禮服を着て、彼の顔は曇れ果て、變り果て、色は蒼白になつてゐる、杖に縋つて力無げによるめき来る)

タンホイゼル (力ない聲で)

豎琴をおれは聞いたが、——何て悲しい音であつたらう、——。
まさか彼女かのぢよよりではなからうなあ。

フルフラム

誰だ、お前は、巡禮よ、

其様に寂しう彷徨うて來たのは。

タンホイゼル

おれが誰だと?——

おれは君をばよく知つてる、——フルフラムではないか、

(嘲つて)

如何にも巧者な歌人様。

フルフラム (激しく愕き)

ハインリッヒか、君か、さて?

タンホイゼル

九一

何うして君は斯様な處へやつて來た、云へ、それを、
罪の贖ひ出來ないで此地へ君はよくもよくも、
足を入れたな、よくも彷徨して來たな？

タンホイゼル

心配御無用、誠に芽出度い歌人様。

おれが探すのは君でない、君のお仲間達でもない。

(薄氣味悪い肉的快乐の渴望を湛へて)
おれが探すのは、おれに道をばよく教へ知らせる人だ、——
それは前かた不思議な位の雜作なくおれが見出した其道だ、——。

フォルフラム

で、その道とは？

タンホイゼル

エエヌス山へ行く道さ。

フォルフラム

言語道斷！ おれの耳をば穢して呉れるな。君は其方へ行くと云ふのか？

タンホイゼル (低い聲で)

知つてるとでも云ふのかい？

フォルフラム

氣が狂つたか。聞けばおれは悚然とする。

何處に居たのだ？ では羅馬へは行かなかつたのか？

タンホイゼル (憤然として)

云ふな、羅馬の事なんぞ。

フォルフラム

聖なる祭に臨んだのではなかつたのか？

タンホイゼル

云ふな、そんな事を。

フォルフラム

タンホイゼル

その道君が

おれは願ふから。

では彼處には居なかつたのだな？——聞かして呉れ、どうぞ、

タンホイゼル（己れを省察するかのやうな、そして痛憤に堪へぬかぬのやう

な心持）

なる程おれも羅馬に居つた。

ヨルフラム

では話して聞かして呉れ、不幸な友人。

君に對すればおれには深い同情が湧いて来るのだ。

タンホイゼル（長らくヨルフラムを感動と驚異の目を睜つて眺め）

何だと、ヨルフラム？ だつて君はおれの敵ではないのか？

ヨルフラム

君に信仰があると思つてゐた間、おれは決して君の敵ではなかつたのだ。

でも、まあ話せ、君は羅馬へ行つたのだね？

タンホイゼル

よろしい、それでは、

聞け、ヨルフラム、聞いて呉れ。

（ぐつたりなつて山の突出部の裾に腰をおろす。ヨルフラムも其隣に並んで腰かけようとする）
いけない、離れて居て呉れ。おれの休憩する場所は、
咀はれてるのだ。

（それでヨルフラムはタンホイゼルより少し離れて前に立つてゐる）

聞け、ヨルフラム、聞いて呉れ。

贖ひ人が今迄に一度も感じた事のない程の、

熱誠を胸に抱いて、おれは羅馬へ行つたのだ。

あゝ罪惡の驕慢を天使は不遜の

おれより除いて呉れたのだ、

おれには拒絶されてゐる幸をもおれはその天使の爲め、

願ひ度かつた、身の罪も切に慎んで贖ひたかつた、

そして天使が罪惡のおれの爲め嘗て泣いて呉れた

タンホイゼル

涙にせめて慰めの匂ひも沿へと思つたのだ。――

罪の重荷に一番堪へかねてゐるといふ巡禮がおれと一緒に街道を行つてゐる時も其男が軟い草生を踏むとすれば、

おれは素足で石や荊薊の上を歩き、

又夫れしきの事はおれには何ともありはしなかつたのだ。――

清水に其男が口つけて元氣をつけてゐる時も、

おれはかつかと照りつける太陽の火を吸ひ込んだ、

祈禱を彼が慎ましよう天に向つて上げる時、

おれの血潮を至上者の讚美におれは注いだのだ。

疲れて彼が休み場に力を恢復させてゐる時、

おれは五體を氷と雪の寢床に投げて横へた。――

伊太利の見事な風光も見えない様に、おれは

目をつぶつてあの明媚な平野も過ぎたのだ。――

さうしたともさ、――。悔恨自責の心切に、贖ひをして、

おれのあの天使の涙にせめてもの慰めあれと思つたのだ。

羅馬に着いて靈場に行き、祈禱を上げつゝ、

おれは寺院の入口に身を投げ伏せた。――

夜が明けて鐘鳴りわたり、

天上の讚歌が響いて來た。

慈悲祝福を群衆に告げて齋すそれらの音に、

切ない歡呼の聲が湧いた。

そこでおれは見た、神意を傳へる其人を、――

群衆は皆その前に低頭平身したのであつた。

牧師は慈悲を幾千の人に傳へた、罪の消えた、

幾千人をいそいそと立上らせた。

それからおれも寄つて行つた、――頭も大地にすりつけて、

おれの肉慾の享け味はつた罪の快樂と、

どんな贖ひにもまだ冷めかねた情慾とを

嘆き悲しむ心をば顔にも見せて哀訴した、
そして其様な情熱の桎梏からの救済を
叫んで願つた、激烈な悲痛に胸もかき亂れて。

すると牧師は、おれが願つた其牧師は口をきつた、

『お前はそんな罪惡の快樂を味つたのならば、

地獄の情火に熱狂したのならば、

エエヌウス山にゐたのならば、

それではお前は永久に咀はれてゐる。

私のついてる此の杖が決して再び

緑の芽をば吹かない通り。

地獄の慾火から救ひ出される事は

決してお前にありようがない。』と。

おれはがっかりして打倒れ氣も遠くなり、

すつかり喪心してしまつた。正氣づいてみると、

寂しい其處に來てるのはたゞ夜だけだ、――

遠くの方から嬉しさうに大慈悲の歌は響いてゐた、――

その芽出度い調べにおれは嘔吐を催した。

おれの魂の底まで氷の様に冷かに沁みて行つた

その神託めいた嘘つばちの詠歌におれは

悚然として其場を蹴つて飛び出した。

おれが行くのは愛慾と歡樂と無限におれが

嘗て味はつた處へだ、そのあたたかい胸へなんだ。

(凄い様に内慾的に昂奮して)

あなたの傍へ、エエヌスの女神よ、私は歸るのだ、

あなたの魔力の慕はしい夜へ。

あなたの魅力が永久に今より私に

微笑みかけるあなたの家へ。

フォルフレム

タンホイゼル

待て、度し難い我友よ、あはれの友よ。

タンホイゼル

あゝ、私に無駄に探させて下さるな。
嘗ては私どんなに容易に見出したでせう。
聞いて下さい、私を世間の者が咀ふ所を。
さあ、歡樂の女神よ、私を連れて行つて下さい。

(闇夜。舞臺は漸次に軽い霧に包まれる)

フルフラム (激しい恐怖に慄へつゝ)

狂氣の友よ、誰を呼ぶのだ?

タンホイゼル

ほう、此の軟かな微風を君は感じないのか。

フルフラム

おれの所に来い。あゝ君の運命は窮まつたなあ!

タンホイゼル

又此の甘い香氣をば嗅ぎえないのか。

(霧は蔷薇色の氣體となつて蒸し蒸しして来る。)

あの歡樂の音が聞けないのか。

フルフラム

おれの胸はぞつとして、どきどき慄へる。

タンホイゼル (魔力が次第に近づき来るまゝに、愈よ有頂天になる)

あれがニムフェの舞蹈の群だ。

此方へ、此方へ、歡樂に、又愛慾に!

(入り亂れて踊り来る多くの者の姿形、はやそれと見分けられる)

フルフラム

あゝ殘間しい。罪惡の魔力の領となつたのか。
放縱無慙な勢で地獄がやつて来るのだなあ。

タンホイゼル

この模糊とした氣を見ると、おれの官能は、

タンホイゼル

歡喜に満ちて踊り立つ。

これが戀の魔力の國なのだ。

(己れを忘れて)

エエヌス山に我々は入つて行くのだ。

(薔薇色に明るくなった一團の朦朧の中にエエヌスが現はれる。いつもの床の上に題うてゐる)

エエヌス

好うてこそ來ました、不實な男。

あなたを世間は放逐したの？

そして何處でもあなたは慈悲にはぶつからなかつた？

戀を探して私の胸に戻りましたの？

タンホイゼル

あゝ、慈悲深いエエヌスの女神のあなた！

あなたの傍へ、あなたへと私は引きつけられて來る。

ヲルフラム

「*自由にはエエヌスの魔力を離れて自由の意」

地獄の魔力、避ける、避ける。

清い男の官能を誘惑するな。

エエヌス

あなたが又も私の許へ來るのなら、

あなたの倨傲は許してやるわ。

永久あなたへ歡びの泉よ流れよ、

そしてあなたは決して私と離れる事はならないわ。

タンホイゼル (強く意を決して身を荒らかにヲルフラムより振り放しながら)

おれの祝福は失はれたのだ、失はれたのだ、

今は選ぶは地獄の快樂。

ヲルフラム

全能の神よ、此男の良心にお力添へをして下さ。

(更にタンホイゼルを引止める)

ハインリッヒ、一言聞き給へ、それで自由になる君なのだ。

タンホイゼル

君の祝福は——

エエヌウス (萌す心配を覺えつゝ)

おゝ、來らつしやいな。

タンホイゼル (ラルフラムに)

放して呉れ、行き給へ。

エエヌウス

おゝ、來らつしやい。永久あなたは私のものだわ。

ラルフラム

まだ祝福は罪惡の君にも得られる筈だ。

(タンホイゼルとラルフラムの二人は激しく争ふ)

エエヌウス

おゝ、來らつしやい。

タンホイゼル

決してさうでない、ラルフラム、決してないのだ。おれは彼方へ行かねばならな

5.

ラルフラム

地上の天使が君のため願つたでないか。

はや君が上を天翔りつゝ君の福祉を祈つて居るのだ、——

エエヌウス

來らつしやい、おゝ來らつしやい、私の傍へ、私の許へ。

タンホイゼル

放して呉れ。

ラルフラム

エリザベエトの姫君は——

タンホイゼル (身を振り放した所であつたが、急に其場に根が生えた様に佇立して)

エリザベエトの——。

(霧は次第に暗くなる、その中を明るい松明の火が照して来る)

タンホイゼル

男の群の合唱 (舞臺の後ろで)

信心深い殉教の處女の身より

今出て行つた魂たましひに宿れ祝福。

ラルフラム (肅とした感激の態)

君の天使は君が爲め神の玉座で祈るのだ、

それは聞かれる、——ハイインリッヒ、君は救済されるのだ。

エエヌウス (もはや見えなくなつて)

あゝ、悲しいわ、私は失くしてしまつたのか。

(彼女は沈み行く。霧は晴れる。夜の明け方。——ワルトブルクの方から松明をかざした葬列の一行、谷の下の方へやつて来る)

男の群の合唱 (舞臺の後ろで)

天使の處女は酬いられ、

天の歡喜を恵まれた。

ラルフラム (タンホイゼルを軟かに抱く様にして支へ)

聞いてるか、君はあの歌を?

タンホイゼル

聞いてゐる。

(爰で葬列は舞臺の谷の中に入つて来る。年老いし巡禮の群が先きになり、——歌人の群は棺の直ぐ前後に従ふ、彼等に昇がれて開け放してあるその棺の中にはエリザベエトの死骸が入つてゐる。領主、騎士、貴人一同、棺の後より従ふ)

男の群の合唱

神聖な群と諸共に今は永遠の者の前に立つてゐる

純潔な彼女よ、尊いかな。

(こゝでラルフラムは歌人達に合圖する、折からタンホイゼルをそれと見て知つた歌人等は、それによつて棺を其處に据ゑる)

その罪人よ、祝福を受けよ、天上の幸福を、

それを願つてあの姫は泣いて祈つて居られたのだ。

タンホイゼル (棺の傍へラルフラムに連れ行かれ、エリザベエトの死骸に被ひ

タンホイゼル

かゝる様に身を屈め、次第に倒れ伏す)

エリザベエトの我が聖者、願つて下さい、私の爲め。

(死ぬる。——一同は松明を地に落し、そして消す。朝の光に舞臺はすっかり明るくなる)

年若い巡禮の群の合唱 (前方の山の突出部に沿うて歩む、その隊の中程に牧師の杖の新たに緑の芽を吹いたのを捧げて来る)

大なるかな御慈悲の奇蹟の福祉。

救ひは降りぬ、人の世に。

尊き夜に大神は奇蹟を現じ、

告げ給ひけり、み心を。

緑滴る芽を吹かせ、飾り給ひぬ、枯れはてし

牧師が持ちし杖をこそ。

冥府の業火に苦しめる罪ある者も、

かくて新たに救はれよとの御心。

この奇蹟にて御恵みを受けたる彼に

告げよ、その由、ありとある國原越えて。

此の全世界の上に高く、神は臨みてまませり、

いかで嘲り戯れと誰か云ふべき、大慈悲を。

讃へまつらん、御功德。

讃ふべきかな、御功德。

一同 (感動の極の態度)。

罪ある彼に大慈悲の福祉は授けられにけり、

かくて行くなり、彼ははや天の平和の食國へ。

(をけり)

ロオエングリン

(三幕物歌劇)

人 物

ハインリヒ・デル・フォオグレル (Heinrich der Vogler) 獨逸王。

ロオエンダリン (Lohengrin)

エルザ・フォン・ブラバント (Elsa von Brabant)

エルザの弟ゴットフリイド (Gottfried)

ブラバントの伯フリードリヒ・フォン・テルラムンド (Friedrich von Teramund)

その妻オルトルウド (Ortrud)

王の傳令。

ブラバントの貴族四人。

小姓四人。

ザクセン (Sachsen) とテュウリンゲン (Thüringen) の伯及貴族若干

ブラバントの伯及貴族若干。

上臈數人。

小姓數人。

兵士、女子、奴僕各若干。

場所

アントエルペン (Antwerpen)*

時

第十世紀の初葉。

*ブラバントは今次の世界戦で有名になつたブリュッセル、アントエルペンの地方(白耳義)

*古代の羅馬、希臘、日耳曼等で柏が神聖視されてゐた事は世人周知の事であつて、殊に北方が歐では柏の葉の風にそよぐ音によつて神託を聞くなどといふ事もあつたのである。(Gerichtseiche)
**これは皇帝の國の意味でなく、たゞ美稱として用ゐられてゐる事勿論である。

第一幕

第一場

(アントエルペンの傍を流るゝセルデ河畔の沃野。河は舞臺の後方へ折れ曲り、その右手は二三の樹立に隠れ、なほずつと奥に行つてから又見えてゐる)

(舞臺前面の左手にハインリヒ王、^{いかめ}厳しい法^{のり}の柏の老木の下に腰うちかけ、其後ろに接してザクセンとテウリンゲンの伯、貴族、武人等立つて従ひ、王の徵募兵の一隊を成して居る。それに向き合つてブラバントの伯、貴族、武人、庶民等立ち、その先頭にフリードリヒ・フォン・テルラムンド、その傍にオルトルウドが並んでゐる。兵士、庶民、奴僕^の群、後方一體を埋めてゐる。中央は打開けた空地。王の傳令と角を吹く四人の兵士とが中央に進み出る。後者が王の譜を吹く)

傳令

聞き給へ、ブラバントの伯、貴族、自由の民の人々よ、

我が帝國^{**}の法により皆様と約束を結ぶため、

獨逸王ハインリヒが來られました。
如何です、平和と服従を王命に捧げますか。

ブラバントの人々

平和と服従を我等は王命に捧げます。

(武器を打鳴らしつゝ)

よう来て下さいました、獨逸王、よう来て下さいました、ブラバントに。

國王ハインリヒ (立上り)

神よりの挨拶あれ、方々に、ブラバントの方々に。

私は今度方々を無用に訪ねたわけではない、

(極めて重々しく)

先づ此の獨逸が東方からあんなに屢々侵された

難儀を私は先以て爰に述べねばなるまいか？

遠い邊境で女子供が『神様、我等をウングルン(匈牙利人)の狂暴に對し防いで下さ
51と、

*この實は獨逸側より匈牙利に對してなしてゐたのである。

祈つた事は方々承知の筈でせう。

國の元首たる私は、そんなに甚い屈辱は何うしてなりと
絶やしてやるのが天職でした。

それで戦争の報償として九年の平和を

得たのです、——それを私は帝國の防備に利用したのです、

都市を守らせ、城塞を築かせ、

徵募の兵に抵抗防禦の訓練を施しました。

所が今や期限終り、貢もしなくなつたのです、——

敵は頻りに脅かし猛り迫つてゐるのです。

國の名譽を保つべき時は今です、

東と云はず、西と云はず、皆共々に。

獨逸の國である限り、皆軍隊を出さねばならない、

さうすれば誰も我國をもはや侮りえはしない。

ザクセンとテュウリンゲンの者一同 (武器を打鳴らしつゝ)

いざいざ神と諸共に獨逸帝國の名譽の爲め。

國王 (又腰をかける)

それで、ブラバントの人々よ、私は方々が
マインツへ從軍する様云ひに來たが、

今方々が君主なく、内輪の揉めをやつてゐるのを

見ねばならないのは、何といふ悲痛であらう、嘆かほしい事であらう、
私の耳に入るのは紛亂と甚い確執、

それで私は其方々を呼んだ、フリードリヒ・フォン・テルラムンド。

私は其方を一切の徳義の頭と承知してゐる、

だから此の内患の原因が私に分る様云つて貰はう。

フリードリヒ・フォン・テルラムンド (嚴然とした態度で)

感謝をします、國王よ、よくこそ裁きに來て下さいました。

私は眞實を申します、不忠實は私の性ではないのです。――

ブラバントの領主病没の際、

エルザの姫と令息のゴットフリード殿の

姉弟二人の後見を私に頼まれたのであります、

私は少年期のゴットフリード殿を忠實に養育致しました、

令息殿の生命は私の名譽が寶玉とした所です。

ですから私の名譽の寶玉が奪はれた時の

私の悲痛、國王よ、思つてみて下さい。

ある時姫が令息と森に散歩に行かれました、

歸りにはたゞ一人つきりであつたのです、

そして心配顔を作つて弟はと尋ねるのです、

はぐれて見失つたとかで、探しはしても念息の行方

どうしても分らなかつたと云ふのです。

あらん限りの手を盡し探しましたが駄目でした。

それで私は脅かしてエルザの姫に迫つてみると、

おどおどして顔も蒼さめ慄へてゐる姫の様子に、

白状も同様な怖ろしい罪を私は見抜いて知りました。

(滔々と勢ひよく)

思へば私は姫には悚然と怖ろしくなりました。姫と一緒にたつてよいと父領主には云はれておりましたが、私はそれ故私から其所存を翻へし、私の心に適うた妻を娶つたのです。

(オルトルウドを紹介する、オルトルウドは王に向ひ頭を下げる)

オルトルウドと云ひまして、^{*}フリイスランドの領主ラアドボオドの血統であります。

(そしてフリードリヒは嚴めしく、二三歩進み出る)

それ故私はブラバントのエルザ姫を訴へます、弟殺しの罪があると私は訴へます。

そして領主の血縁の一等近いのは私ですから、

私は此國を正當に私のものと主張します、

それに私の妻も嘗て此國の數人の領主を出した

^{*} 北海に臨んだ一帯の地方エムス河とエゼル河との中間地區

家柄の者であるから、尙ほ更です。――

これが訴へです、國王よ、正しく裁判して下さい。

男の者一同 (嚴かな恐怖に襲はれた態度)

はあ、嚴しい罪をテルラムンド殿は訴へられるのだなあ。かうした訴を聞いてみると怖ろしいわい。

國王

何といふ怖ろしい訴へを其方は云ふのか。そんな大罪が何うして起るのであらう?

フリードリヒ (愈よ力強く)

あゝ、國王、浮薄な姫は夢想の奴でありまして、

私の求婚の手を傲慢至極にも突き除けました。

故に私は姫が祕密の姦姪をも訴へます、

(愈よますゝ、苦々しげな癢に觸つたらしい心の様子を曝露しながら)

姫が胸では弟をさへ亡き者にすれば、

ロオエングリン

自分がブラバントの領主として、臣下の私の

求婚の手を斥けるのも権利であり、

そして秘密な姦夫を公然と養ふ事も出来ると思つたに相違なしです。

國王 (熱心に述べ立てるフリードリヒを屹とした顔つきで遮り)

被告を此處へ呼ぶがよい。

(極めて嚴肅に)

それでは裁判の開始だ。

神よ、私に賢明を授け給へ。

(傳令は嚴肅に場の中央に進み出る)

傳令

此處に王威と正法により裁判が行はれるのでありますか。

(王は嚴めしく儀式を遵奉する形で楯を柏の樹に掛ける)

國王

寛嚴宜しきを得た裁判を私が爲し終る迄、

楯が私を被うてはならない。

男の者一同 (劍を抜き、ザクセンとテュウリンゲンの者は、みなそれを自分たち

の前の大地に突き刺し、ブラバントの者は、切尖を下にして前に

差し出してゐる)

裁判によつて正法が保たるゝまで、

此の劍は鞘に納まりはしない。

傳令

皆さんが國王の楯を見られる所には、

又裁判により正法の保たれるのを見られるのである。

それ故私は聲高に明かに訴へ呼ばはる、

エルザの姫よ、爰に出場されるがよい。

第二場

(極く質素な白い服を着てエルザ登場、少しの間は舞臺の後方に居る、それから極めて徐々に又産を含んで前方の中程へ歩み来る、彼女と同様に白く質素な服装をした上臈若干従ふ、併し彼女等は先づ舞臺の後方に、審きの場の極く端れに立止る)

男の者達

見るがいい、姫が来た、嚴しい被告の姫が来た。

はあ、何て明るい無垢清淨な様子であらう。

あの姫にあんな重罪を被せるとは、

此人は嘘や確證を持つてるのだらうなあ。

國王

そなたか、ブラバントのエルザ姫とは？

(エルザ肯く)

そなたの裁判官として

私をそなたは承認なさるか。

(エルザは王の方へ向き、王の目に見入り、それから信任し打任せきつた様な表情で「はい」とい

ふ意味を答へる)

それでは私は

お尋ねするが、爰でそなたに對し嚴しく

提起されてる訴へにそなたは覺えがありますか？

(エルザはフリードリヒとオルトルウドを見、立上り、それから物悲しげに頭を下げ、然りとい

ふ意味を答へる)

答辯なさるか？

エルザ (顔つきで「何も答辯しない」といふ意味を答へる)

國王 (活潑に)

それでは罪を

承認なさるか？

エルザ (少しの間悲しさうに向うをぼんやりと見てゐたが)

あゝ、可哀さうに、あの弟！

男の者一同 (囁く)

不思議な事だな。不思議な様子だなあ。

國王 (感動の態)

お話しなされ、エルザ姫。私に打明けなされるのは何ういふ事か？

(皆々黙つて熱心に答を待つ)

エルザ

獨り寂しく、陰氣な日に

私は神に祈りました、

心の底の訴への

祈りを私は捧げました。――

すると私の悲痛な嘆きの聲の中から

殊に嘆きに満ちて漲り出た一つの音が、

強い響きになりましたして空中へ、

ずつと擴がつて行きました。――

それが遠くへ響き行き、もはや私の耳に入らなくなるまで、私は聞いて居りました。

私の目はおのづと閉ぢ、

甘美な眠りに私は沈んで行きました。

男の者一同 (低い聲で)

變だなあ。夢みて居られるわけか知ら？ 放心か知ら。

國王 (エルザを夢より覺まさうとするかの様に)

エルザ姫、辯護をなさるがよろしいでせう。

(エルザの顔つきは夢想的放心の狀から熱誠な醇化と讚美の狀に移り行く)

エルザ

鮮明な武器の光と共に

一人の騎士が其處に來ました、

品格高い立派な人で、外には私

さういふ方を見ませんでした。

ロオエングリン

黄金の角笛を腰に結び、

劍に靠れて立つてゐましたが、――

さうして空中より私の方へ

寄つて來ました、立派な其騎士の方は、

氣品も高い面持ちで、

私を慰めて下さいました。――

その方に私はかしづき度いと思ひます、

その方が私の爲めの戦士であつて下さるよう。

男の者一同 (甚しく感動する)

おゝ上帝よ、誰が爰で悪人なのやら、

はつきり我等に分る様にして下さい。

國王

これ、名譽あるそなた、フリードリヒ、

(力を籠めて)

よう考へなさい、誰をそなたは訴へるのか？

フリードリヒ

私は彼女の夢想的な氣分で惑はされはしないのです。

(愈々狂熱的に)

あれが即ち姦夫の事を云つてゐるので、ねえ、お分りでせう。

私が彼女を罪とする件は、私に確たる理由があります。

彼女の悪業は、十分信を置くに足る證據が私にあるのです。

併し私が一箇の證據で皆さんの疑惑と戦ふのは、

實際私の誇を傷ける事なのです。

爰に私は立つてゐる、爰に私の劍がある。――

皆さんの中の誰がよく

私の名譽の榮冠を敵として戦ふのです？

ブラバントの人々 (勢ひよく)

そんな者は一人もありません。我々は皆あなたの爲めにぞ戦ふのです。

ロオエンダリン

フリイドリヒ

それで、あなたは、國王は、私があゝの狂暴な丁抹勢を討ち退けた功績を思出しては下さいますか？

國王 (熱心に)

それをそなたに思出させられる様では、何と私も堪らないではあるまいか。

私はそなたに最高の道義の榮譽でも悦んで上げる。

私は此地をそなた以外の何人の

守護にも委ねたくはない位である。――

(嚴肅な決意と共に)

たゞ神のみが

今この事件の審判をなさるであらう。

男の者一同

神の審判、神の審判。それでは、いさや。

國王 (自分の劍を抜き、嚴かに自分の前の大地に刺す)

そなたに尋ねる、フリイドリヒ、伯テルラムンド、そなたはそなたの訴へを生死を賭して、戦ひにより神の審判を受くる事を望むか、如何。

フリイドリヒ

望みます。

國王

それでは、そなたに尋ねる、ブラバントのエルザ姫、そなたは爰で生死を賭してそなたの爲めに戦ふ者により、神の審判を受くる事を望むか、如何。

エルザ (目を見開きもせずに)

望みます。

國王

誰を戦士に選びます？

フリイドリヒ (焦つて)

ロオエングリン

それ、お聞きなさいよ。
姦夫の名をば云ひますぞ。

ブラバントの人々

氣を附けて聞かうよ、

いでや。

エルザ

(位置も恰好も變へず、又熱誠な讚美の顔つきも其儘にしてゐる。一同は氣を張り詰めて彼女を見守る。彼女は確とした調子で)

その方に私は侍き度いと思ひます、

その方が私の爲めの戰士であつて下さるよう。

(四邊を見廻す事なく)

神より遣はされる其方に

何を私が上げるかをお聞き下さい、――

父の國での冠を

かぶるは其方。

私の所有が其方の所有となる時、

どんなに私は幸福でせう、――

私の夫に其方がなると云ふ時、

私は私のすべてをば其方に捧げます。

男の者一同 (咳く)

神の御手にあるとは云へ、何と見事な褒賞だらう。

その褒賞の爲めに戦ふ者は、どんな物でも擲つてかゝる道理だ。

國王

はや午となり、太陽は高く昇つた、

ではその旨を傳へねばならない時だ。

(傳令は角を吹く四人の兵士を従へて登場、その四人を東西南北の四方に分けて配附し、裁きの場の四方の端に就かせ、其處で角を吹かせる)

傳令

ブラバントのエルザの姫の爲め神の審きの戦ひに

此處に來た人は進み出られよ。

(しんとした長い沈黙)

(今まで絶えず静穩な態度を保つてゐたエルザは、次第に期待の不安を見せる)

男の者一同

答へは無しに消えて行く、今の呼び聲。

姫の方が悪いのだなあ。

フリードリヒ (エルザを指し)

如何です、私の悪口が無茶でしたらうか？

私の方に正法があるといふものです。

エルザ (少しく國王に近く寄つて行き)

國王様、どうかお願ひでござります。

今一度私の戦士を呼ばして下さいまし

(極めて無邪氣に)

多分遠くに居ますので、聞えないのでござります。

國王 (傳令に)

裁判の呼び出し今一度云へ。

(角を吹く四人の兵は傳令の指圖に従ひ再び四方の端に就く)

傳令

プラバントのエルザの姫の爲め神の審きの戦ひに

此處に來た人は進み出られよ。

(又もや緊張した長い沈黙)

男の者一同

鬱憂な沈黙の裡に神は裁判をするのかなあ。

(エルザは跪いて切ない祈禱三昧に沈む、侍女の上臈達は姫を氣遣ひ少し前方へ寄つて來る)

エルザ

神よ、あなたは私の嘆きをあなたの方に傳へて下さいました、

御指令受けてあの方は私の許へ参りました。

あゝ、神よ、今も私のあの戦士の方にお傳へ下さいまし、

私の難儀を救ひに来て呉れまする様。

(次第に感激に驅られ来る)

曩さきにあの方に逢ひましたやう、今も逢はして下さいますし、

(光明を感じた様な嬉しさうな顔つきになり)

曩にお逢ひしました様に、あの方い來らして下さいますよう。

上藤達 (跪ひざつき)

神よ、姫をお救ひ下さいまし。

神よ、此の願お聞入れ下さいまし。

(河の岸に直ぐ接した小高い丘に立つてゐた男等の一團が最初に先づロオエンダリンの到着を認める、ロオエンダリンは一羽の白鳥に曳かせた一葉の舟に乗り、遙か彼方の河の水面に現はれる。河岸より稍遠く離れて舞臺の前方に立つてゐた男達は最初は其場を去らないで、河に近く居る者共の方に向つて、たゞ募り来る好奇心のまゝに尋ねてゐる様子であつたが、後には三々五々思ひ思ひに其處を離れて親しく自分で見に行く)

男の者共

見給へ、見給へ、何といふ奇蹟であらう、どうだね、白鳥だね？

一羽の白鳥が小舟を一つ引いて来るではないか。

中には一人の騎士がすつくと立つて居るではないか。

あのもの武器の輝く事よ。目も眩みさうだ。

見給へ、はやもうすつと近く来た。

金の鎖で白鳥が曳いて来るのだ。

(あとに残つてゐた男達も皆後ろの方へ急ぎ行く。舞臺の前方の所はたゞ國王、エルザ、フリードリヒ、オルトルウド及び上藤達だけとなる)

(王は稍高まつた自分の席から一切を見渡す事が出来る。フリードリヒとオルトルウドは愕き怖れて悚然とする。エルザは男の人々の呼び叫ぶ聲を愈よ悦びに熱して聞いてゐるが、舞臺の中央にもとのまゝに立止つて、思ひきつて彼方を見返らうとはしない)

男の者一同 (非常に感動して再び前方に走り戻りながら)

奇蹟だ、奇蹟だ。奇蹟が起つた、

未知未聞の奇蹟が近づいて来た。

上臈達

(跪ひざまづいて感謝の念に餘念もない形)

感謝をします、主よ、弱い者をお守り下さる大神よ。

(爰て又一同の視線は期待に燃えて舞臺後方に向けられる)

第三場

(エルザは後ろを振り返つてロオエン格林を見るや、高い叫び聲を上げる)

男達と上臈達一同

我々の挨拶をお受けなさい、神より遣はされたあなた。

(白鳥に曳かれた小舟は舞臺後方の中央に来て岸に着く。眩しく煌めく銀の鎧に身を固めたロオエン格林は、頭には胄、背には楯をつけ、小さい金の角笛を腰にさげ、劍を杖として舟の中に立つてゐる。——フリードリヒは言葉も出ない程に愕いてロオエン格林を見やる。——その時までの裁判の間冷静な驕慢な態度をしてゐたオルトルウドは、白鳥が目につくや否や殆ど致命的な恐怖に襲はれる。一同は非常に感動した態で帽を脱ぐ。ロオエン格林が舟を去るべく始めて

からだを動かすや、一同の間には、しんとした緊張の沈黙が漲る)

ロオエン格林

(まだ片足を舟の中に置きながら、白鳥の方へ身を屈めて)

やあ、どうも有難う、可愛い我が白鳥よ。

お前の舟で私を乗せて来た

もとの所へお歸り、又遠い舟路を曳いて。

たゞ我々の幸福の領へ再び戻つてお行で。

では、よくお前の勤めを果たして呉れたね。

さよなら、さよなら、可愛い我が白鳥よ。

(白鳥は徐じゆかに舟を彼方へ曳き向け、流れを泳いで歸る。ロオエン格林は暫くの間悲しさらに其後を眺めやつてゐる)

男女共々に

(感動の態、そして低い聲で囁く)

何て斯う不思議に氣持よく心がぞくぞくする事でせうね。

何といふ温雅な力に我々は包まれてゐるのでせうね。

あのような今の奇蹟によつて爰に來たあの人は

ロオエン格林

何て立派な男だらう、何て氣高い風采だらう。

ロオエン格林 (河岸より離れて、威風肅としてゆつたりと前方へ歩み來り、王に對し禮をする)

天の寵ある國王よ、あなたの劍に

神が福祉を授け給ふ事を祈ります。

あなたの名は榮譽に充ち、偉大であつて、

決して此の地上より消え失すべきではありません。

國王

有り難う。そなたを此國に寄越した力に對し

私の抱いてゐる見解にして誤でないとするれば、

そなたは神より遣はされて來たのでせうがな。

ロオエン格林 (なほも一層中央に進み出て)

ひどい訴へをされてゐる娘の爲めに

戦ひに立つべく私は遣はされたのであります。

どれ、果して私が丁度よい所に來たか
一つ彼女に逢つてみませう。――

(少しエルザの方へ向き)

では話して貰ひます、ブラバントのエルザ姫、――

私があなたの戦士と任命されて來たからは、

あなたは恐れず氣遣はず私の守護に

信頼なさるでありませうな？

エルザ (ロオエン格林を見てからといふもの、魔力にかゝつた様に身動きも

出來ずぢつとしてゐた彼女は、彼に話しかけられてはつと自に復り、歡

喜の情に堪へかねて彼の足許に身を投げ伏す)

私の勇士の御方、救ひの御方、私を取つて下さいまし。

私は私の一切をあなたに差上げますわ。

ロオエン格林 (暖い心で)

私があなたの爲めに戦つて勝てば、私があなたの

ロオエン格林

夫となる様、あなたはそれを望みますか？

エルザ

あなたの足許に平伏致してゐます通り、
身も魂も私はあなたに差上げますわ。

ロオエンクリン

エルザの姫よ、私があるあなたの夫となるべきならば、
國土國民をあなたの爲めに護つてやるべきならば、
そして決してあなたより再び別るべきでないならば、
それにはあなたは一事を私に誓はねばならない、――

決してあなたは私に尋ねてはならない、

又知り度いと思つてはならない、

どこから私が来たのであるか、

又私の名や氏族が何であるかを。

エルザ（殆ど無意識に、低く）

そんな疑問、私に起る事神かけてありませんわ。

ロオエンクリン（感激して極く生真面目に）

エルザの姫よ、あなたは私が云つた事をよく聞取つたのですか。

（尙ほ一層確りと）

決してあなたは私に尋ねてはならない、

又知り度いと思つてはならない、

どこから私が来たのであるか、

又私の名や氏族が何であるかを。

エルザ（深い親みを顔つきにも現はして彼を見あげ）

私の保護者の御方、天使の御方、救ひの御方、

私の無罪を固く信じて下さる御方。

幾ら疑ひの罪があつても、あなたを信する心をば

失ふのより大きい罪が何うしてありませう。

私の災難をあなたが救つて下さる通りに、

ロオエンクリン

きつと私は心からあなたの命令を守りますわ。

ロオエンダリン (感動し昂奮して彼女を自分の胸の方へ抱く様にしてかき上げ)

エルザ姫、私はあなたを愛するよ。

(二人は少しの間そのままの姿態で居る)

男女の群 (感動、低い聲で)

何て優雅な温藉な奇蹟を私は見るのだらう。

私は魔力にかゝつてゐるのだらうか。

あの氣高い歡喜の人を見れば、

私の心は恍惚として消えて行きさう。

(ロオエンダリンはエルザを國王の前に伴ひ行き、王に其場の保護を頼み、それから自分は嚴かに場の中央に進み出る)

ロオエンダリン

皆さん、上下の別なく、お聞き下さい、私がお知らせする事があります。

ブラバントのエルザの姫には何の罪惡もありません、
テルラムンドの伯よ、あなたの訴へは誤つてゐる、
神の裁きによつてあなたはそれを知るがよからう。

ブラバントの貴族等 (はじめは二人二人、後には次第に多くの者がフリードリヒに内密に)

戦ひをよすががい。若しあなたが戦つたら、

勝つ事は決して出来はしない。

あの男が最高の力で守られてゐる以上、

あなたの勇敢な劍もあなたに何の役に立たう。

およしなさい。我等は赤心から忠告する。

あなたを待つてゐるのは敗北だ、後悔の苦い毒汁だ。

フリードリヒ (その時まで一心不亂にロオエンダリンを見詰めてゐた彼は、胸に悶々たる躊躇逡巡の戦ひを嘗め、やつと深く決するかのやうな態度を見せて)

臆病よりは死がまだ。

これ他國人、あなたは大へん私に對し大膽不敵に見えるんだが、
どんな魔力によつて御來なすつたか知らないが、

私は嘘をついてるとは思はないから、

あなたの其の驕慢な脅かしにちつともびくともしはしない。

だからあなたと戦ふ事を私は承知だ、

そして正義の進行によつて打勝つ事を望んでゐる。

ロオエンダリン

それでは、國王、我等二人の戦ひの手配を云ひつけて貰ひませう。

(人々裁判開始の準備をする)

國王

それでは双方の爲め三人づゝ進み出るがよい、

そして戦ひの輪を測るがよい。

(ロオエンダリンの爲めにはザクセンの貴族三人、 フライドリヒの爲めにはアラバントから三人

進み出て、儀式張つた嚴かな步調で果し合ひの場を測定し、自分等の槍で眞丸な圓を描いて其境界を示す。)

傳 令 (仕合の場の中央に進み出て)

さあ、誰方も聞いてよく氣をつけてゐらつしやい、

誰方も決して此の仕合ひの妨げをしてはなりません。

境界線から離れて居なくちやなりません、

若し此の平和の大法を顧みない者があつたら、

獨立の人では手を失ひ、隸屬の者では其首を

失つて償ひをせねばなりませんぞ。

男の者一同

獨立の人では手を失ひ、隸屬者では其首を

失つて償ひをせねばならない。

傳 令 (ロオエンダリンとフライドリヒ兩人に)

裁きの前に仕合ひをするあなた方二人もお聞きなさい。

ロオエンダリン

仕合ひの義務を忠實に守つてやらねばなりませんぞ。

邪悪な妖魔の陰謀だの詐りだので

裁きの本来の面目をまぜかへしてはなりませんぞ、――

神が正當な権利によりあなた方をば裁かれます、

だから神に信頼なさい、御自分の力を持つんではいけません。

ロオエン格林とフリードリヒ（仕合ひの場の外に兩側に離れて立ち）

神よ私を正當な権利によつて裁き給へ、

私は神に信頼する、自身の力を持つはしない。

國 王（非常に嚴肅な莊重な態度で場の中央に進み出て）

我が主よ神よ、私はあなたに申し上げます、

（一同脱帽靜肅敬虔な様子）

どうぞ此の仕合ひを照覽なさつて下さい、

眞實と虚偽とが明瞭に分りますよう、

劍の勝によつて判決を下して下さい。

正しい者の腕に勇士の力を授けて下さい、

悪人の力は弱る様にして下さい、

お力添へをして下さい、神よ、今此時、

我等の知識は單純であります。

エルザとロオエン格林

我が主よ神よ、さらばまことの裁判を

お告げ下さい、私は遂巡致しませぬ。

フリードリヒ

我が主の神よ、忠實に私はあなたの裁判の

前に出ます、それ故私の名譽をお見捨てなさらなさいで下さい。

オルトルウド

私は固くフリードリヒの力に信頼してゐるわ、

戦ふからは屹度勝つに違ひはない。

男の者一同

ロオエン格林

正しい者の腕に勇士の力を授けて下さい。

悪人の力は弱る様にして下さい。

わが主よ神よ、さらばまことの裁判を

お告げ下さい、躊躇なくお告げ下さい。

上臈達一同

わが主よ神よ、あの方に恵を垂れて下さいまし。

(一同は非常に厳肅な儀式張った態度で各自の席に戻す。仕合ひの證人六人は輪に沿うて自分の槍を突き立てた傍に立ち、餘の男の者達はそれから少し隔たつて其輪の圍りに位置を取る。エルザと其上臈達は舞臺前方の國王の傍の柏の下に控へる。角を吹く四人の兵士は傳令の合圖によつて戦ひの譜を吹き鳴らす。その間にロオエンダリンとフリードリヒは仕合ひの準備を終る。——王は自分の劍を大地より引抜き、それで柏に掛けた楯を三度打つ。その第一度目に打つた時ロオエンダリンとフリードリヒは仕合ひの場に着く、二度目の音で二人は劍を抜いて身構へし、三度目で仕合ひを始める。最初ロオエンダリンが斬りかゝる。激しい數度の手合はせの後ロオエンダリンはずつと切尖を延べて敵を仆す。フリードリヒは今一度起き上らうとするが、たゞくと二

三步よろけ退つて倒れる)

(フリードリヒが倒れると、ザクセンとテウリンゲンの者達は各自の劍を大地より引抜き、ブラバントの者共は亦自分等が前へ差延べてゐたのを後ろへ引く。國王は楯を柏より取り下す)

ロオエンダリン (自分の劍をフリードリヒの頭に當てたまふで)

神の勝利によつてあなたの命は今や私の所有になつた。

(フリードリヒを離れつゝ)

その命あなたに呉れよう、それであなたは悔い改めに入るがよい。

(男の者一同は劍を鞘に收める。仕合ひの證人は自分達の槍を地より抜く。貴族其他男の者一同は歡呼して今迄の仕合ひの場に入り込み来る、で其處は直ぐ一ばいの人集りになる)

國王 (同じく劍を鞘に收める) 男の者共、上臈達

勝つた、勝つた、勝つた。

萬歳、萬歳、わが勇士。

(王はエルザを其處につれて来る)

ロオエンダリン

お、あなたを立派に讃へられる
最高の讚美に充ちた歌を、
あなたの榮譽に適はしい歌を、
私は見出せるでせうか、その歡呼の歌を。
私は此身の幸福を思ひますれば、
あなたの爲めには絶え入らなければなりません、
あなたに對し消え入らなければなりません。
私のすべてを差上げます。

(ロオエングリンの胸にもたれ沈み入る)

ロオエングリン (エルザを自分の胸より抱き起しながら)

あなたの純潔によつてのみ

私は勝を得たのです。

これであなたが受けた苦しみは

十分償はれてあらねばならない。

フリードリヒ (大地に蹲り苦しみ悶えてゐる)

あゝ辛い、おれは神に打負けたのだ、

神故おれは勝てなくなつた。

おれは幸福は斷念せねばならない、

おれの名譽も光榮も消えてしまつた。

オルトルウド (フリードリヒが打負かされたのを見て憤激した彼女は、恨め

しげにロオエングリンを脇目も振らず見詰め)

良人を打負かしたのは誰なの？

私がどうも出来ないのは誰なの？

其奴の前に私は絶望せねばないならか知ら？

私の希望はすっかり消えうせちまつたか知ら？

國王と男の者共

響け、勝利の歌のふし、

ロオエングリン

響け、勇士に、高らかに、讚美の限り。

君が榮ある此の旅行、

君がめでたき此の來着、

幸ひあれよ、君が技、

信ある者の保護の君。

(ますます感激を募らせる)

信ある者の權力を

君は守りぬ。

君がめでたき此の來着、

幸ひあれよ、君が技、

(感激の絶頂に達する)

君をのみこそ我等は歌へ、

響けよ、君に、我等が歌よ。

君に比すべきますらをが、

いつかは此處に又來べき。

上 藤 達

おゝ、あの方を立派に讚へられる

最高の讚美に充ちた歌を、

あの方の榮譽に適はしい歌を

私は何處に見出せませう、その歡呼の歌を。

信ある者の權力を

君は守りぬ。

君がめでたき此の來着、

君がうれしき此の旅行。

(ザクセン方の年若い男たちはロオエン格林を彼の楯に載せ、ブラベント方の男たちはエルザを國王の楯に載せる、楯の上には共に豫め彼等が自分等の外套をひろげて敷いてゐる。そして芽出度い二人は歡呼の裡に昇ぎ行かれる。フリードリヒはオルトルウドの足許にぐつたりと力盡きて倒れ伏す。)

第二幕

第一場

一五六

(アントエルベンの城廓内。後方の中央に天守閣、前方の左手に上臈達の局の建物がある。前方の右手には拜禮堂への入口があり、その後ろに塔の入口が見える。夜である。天守の窓は皆明るく照らされ、その裡より歡呼の樂が聞える、角や喇叭の音も娛しげに響く。拜禮堂入口の階段にフリードリヒ、オルトルウドの兩人、見窄らしい服装をして腰かけてゐる。オルトルウドは膝に肘を突きながら、輝いてゐる天守の窓の方を一心不亂に見詰めて居り、フリードリヒは滅入りさうに陰氣で氣味悪い沈黙)

フリードリヒ (急いで起き上り)

おい、立てやい、おれの恥仲間、

新らしい日においらは最早此の身を曝すわけにやいかない。

オルトルウド (様子恰好そのまゝで)

私あ行かれないよ、私あ爰に縛られてるよ。

仇の祝ひのあの輝きの中から私あ

怖ろしい死の毒を吸ひ度いのさ、

それで私等の恥と彼奴等の悦びに終りをづけさしてやり度いのさ。

フリードリヒ (オルトルウドの前に陰氣に進み行き)

怖ろしい阿魔奴、手前の傍に何でおりやまだ

引きつけられて居るだらう?

(次第に語氣も様子も荒々しくなり行き)

何故おりや手前を置き去りにして

行けないのだらう、おれは逃がたい逃がたい、

(悲痛さうに)

おれの良心が再び安らかになる處へ。

(悲痛さうな感傷と憤怒を激しく勃發させる)

手前のお蔭におりや名譽も手柄も

ロオエングリン

一五七

一切失くさなきやならなかつたんだ。
 讚美はもはやおれを飾つて呉れはしない。
 恥辱がおれの手柄なんだ。
 破門はおれに云ひ渡され、
 おれの劍は折れて散らかり、
 おれの紋章は引裂かれて、
 先祖代々の家も咀はれたんだ。
 これぢやあ何方へ身を向けても、
 おりや罪人だ、追放人だ、
 盜賊だつておれを見るのは目の穢れと
 云つて遁げるにきまつてる。
 あゝ、こんなに悲惨になる位なら、
 (泣き出しさうに)
 おれは死んだがました。

(絶望落膽の極)

おれは名譽を失くなした、

おれの名譽は、名譽は消えて行つてしまつた。

(悲しさうに悶え狂うて大地に身を投げ伏せる。――天守閣からは音楽の響)

オルトルウド (間もなくフリードリヒは起き上るが、彼女は前の通りの姿態)

何でお前さんは其様に激しう嘆き狂うて絶え入りさうに
 しなさるだね？

フリードリヒ

何でだ？ ぬかすな、おれには劍さへ奪はれてるんだ、

(オルトルウドを烈しく突きさうな身振をする)

それで手前を斬殺してやり度いのだが。

オルトルウド (冷かに嘲る)

テルラムンドの

* フライドライヒの伯爵様、どうしてお前さんは私に信用しなさらないんだね？

フライドリヒ

手前がそれを尋ねるんだと？ 純潔無垢のあの女をおれから訴へる様に仕組んだのは、手前の証言でなかつたか、手前の告げ口でなかつたか？

手前の陰気な森の中で、手前の粗末な城の方から、

彼女が悪事をやつてる所を見たとき手前は

おれにだましはしなかつたか？ ——

エルザ自身が弟を其處の池に溺らしたのを、

現に手前のその目で見たと嘘をついたでなかつたか？ —— ラアドポオドの

古い領主の家柄が再び榮えてブラバントに

支配の力を揮ふ様になるとか云つて、

自負自尊のおれの心を、其さかしら口で手前は籠絡しなかつたのか？

それであの純潔無垢なエルザの手から

おれが離れて立つ様に、そしてラアドポオドの最後の裔だからといふので手前を

* フライドリヒ(平和の首長)は本来フライドリヒ(平和に富む者、即ち平和を持し強い者)の意よりして男子の美稱となつたものであるから、今オルトルウドはさういふ温和なるべき名の手前でも、私に何でさう荒々しく笑つかゝつて来るのだと愚弄的に云つたのである。

女房にするよう、おれを誘惑したんでないか。

オルトルウド (低い聲で、併し憤怒の勢凄じく)

まあ、お前さん、よくも私に致命的な侮辱を加へるのね。——

(聲高く)

あゝさうさ、みんな私が云つたともさ、私が証言したともさ。

フライドリヒ (しきりにまくし立てる)

そして、名聲徳望高かつた此のおれを、あらゆるたふとい、道義の冠冕たりしところ

の生命の所有者だつたおれを手前の騙かしの

恥辱極まる仲間に引入れやがつたんだな？

オルトルウド (反抗的な語氣)

誰が騙したえ？

フライドリヒ

手前がさ。——そのお蔭におれは神の裁判で

負けてしまつたではないか。

オルトルウド (凄味の嘲笑的語氣)

神の裁判だとえ？

フリイドリヒ

怖ろしいわい。

手前の口から神の名が、何てまあ怖ろしう響き出るんだ。

オルトルウド

ほお。お前さんはお前さんの臆病を神だと仰しやいますのかえ？

フリイドリヒ

オルトルウド！

オルトルウド

お前さんは私を脅かすのかえ？ 私をさ、女をさ、脅かすかえ？

まあ臆病屋さん、お前さんを今の悲惨な境涯へ突き入れた彼奴にこそ、

それだけの癩癩でお前さんが迫つてたら、

恥の代りに勝利を得たかも知れないのにさ。

(緩りと)

なあに、彼奴に手向ふ法を知つてる者なら誰だつて彼奴ぐらゐは
子供より弱い者として扱ふ事が出来らあね。

フリイドリヒ

あの男が弱ければ弱いほど、

神の力が愈よ強く手傳つて戦ふのだ。

オルトルウド

神の力だ？ おほほほ。

私に勢をつけてお呉んな、さうすりやお前さんに見せて上げるがな、
彼奴を守る其神がどんな弱蟲なんだかさ。

フリイドリヒ (凄愴の感に襲はれ、低い慄へる聲で)

この悪虐な千里眼め、又もやおれの精神を

手前は不思議に誘惑するんだな。

オルトルウド (はや燈の消えた天守の方を指し示し)

食つたり飲んだりした連中は、もう淫樂の臥床ふしどに入つてゐるわねえ、——
私のそばにおかけつてばさ。私の千里眼が
光る時刻になつたわけだよ。

(次の言葉を云ふ間に、フリードリヒは不思議にも凄く彼女に惹附けられる恰好で、次第にオルトルウドに身を寄り寄せ、熱心に彼女の口へ耳を傾ける)

お前さん知つてなさるかえ？ 白鳥の舟に曳かれて
この國に來たあの武士が誰であるやら？

フリードリヒ

いゝや。

オルトルウド

それぢやあ、彼奴おいつが名や身分を

云はねばならない様に強ひられたら最後、

魔のお蔭でやつと附いてゐる彼奴の力もすつかりみんな
失せて了ふとお前さんに私が聞かしてやるが、
聞いてお前さんは何うしなさるえ？

フリードリヒ

はあ、成る程、口止めしてゐる譯が讀めたぞ。

オルトルウド

所でお聞きよ、その祕密を白状させる力のあるのは、
たゞあの女一人きりさ、そんな問ひをばかけては不可ぬと
あんなに厳きびしくあの男に禁じられてゐた
たゞあの女一人つきりだよ。

フリードリヒ

それぢやあエルザがその疑問を其儘にして捨てない様に、
エルザを誘惑すればよいではないか？

オルトルウド

ほう、何てまあお前さん合點のよい事、速いこと。

フリイドリヒ

だが何うしたら成功するかね？

オルトルウド

お聞きよ、だから。――

先づ第一に此處から逃げてはいけないといふ事が
肝腎なんだよ。それでお前さんの智恵を鋭くしなさるがよい。
道理至極な疑念をあゝの女に起させる事だあね、

(きつぱりと)

それにやあ彼奴が裁判を魔法で以て
誤魔化したんだと訴へるのさ。

フリイドリヒ (次第に恐ろしく深い憤激の態になる)

はあ、誤魔化した、魔法の手だ。――

オルトルウド

それで成功しなかつたら、

その時は又暴力の手段もあるわさ。

フリイドリヒ

暴力だと？

オルトルウド

私も秘傳をぐつと深く

無駄に稽古してゐるわけぢやあないことよ。
だから私の云ふ事をよろしくお聞き。
魔力で強くなつてゐる者はな、――そのからだのさ。
極く些細な一部分でも傷はれるとね、
直ぐ弱蟲の本性を見せるものだよ。

フリイドリヒ (口早に)

そりや本當かね？

オルトルウド (景氣よく)

ロオエングリン

あゝお前さんが仕合ひの時にさ、

彼奴の指を一本でも、いやさ、指先き少しでも

傷つけてやつてお呉れだつたらなあ、

あの武士も——お前さんのお手の中のものだつたにさ。

フリードリヒ (自を忘れて)

怖ろしいわい。何をお前はおれに聞かせるんだね。

おれは神によつて打負かされたと許り思つてゐた。——

(甚く憤慨して)

ちやあ裁判は詐欺で掻きまぜられてゐたんだな！

おれは魔力の陰謀で名譽を失はせられたんだな！

あゝ恥の報復、おれも出来さうなものぢやないか、

おれの律義を證據立て得さうなものぢやないか。

あの情夫の詐りを發覺してやれさうなものぢやないか、

そしておれの名譽の恢復が出来さうなものぢやないか。

おゝ、女、今眞夜中におれが面と向つてゐる女、——

今又おれを騙すのだつたら、それぢやあ手前は浮べないぞ、いゝか！

オルトルウド

まあ何てお前さん氣違ひじみて居なさるだね。

落着いてゐなさいよ、慎重にして居なさいよ。

かうしてお前さんに教へてあげるのさ、仕返し氣味よさをね。

(フリードリヒは次第にオルトルウドの傍の階段の上に身を横へる)

オルトルウドとフリードリヒ

ちやあ復讐の業をば爰で誓はうよ、

此の胸の荒んだ凄い夜の中から誓はうよ。

甘美な眠りに耽溺してゐる二人の者よ、

覺えて居ろよ、貴様等に今禍ひが頭を擡げるんだぞ。

第二場

(エルザ白い服を着て望樓に現はれ、手摺によつて頭を手で支へる。——それに対してフリイドリヒとオルトルウド、拜禮堂の階段に腰かけてゐる)

エルザ

わが嘆きをば幾度も
悲しく罩めしそよ風よ、
わが幸福のあらはれし
感謝を今は受けよかし、
君は汝によりて來ぬ、
途に汝はほゝゑみぬ。
汝は荒き浪路にも
替らず君を守り來ぬ、

われ幾度も汝にて

涙を乾かさんとしぬ、
今は戀にぞ熱る頬に
涼しさをこそ願ふなれ。

オルトルウド

あれが女だよ。

フリイドリヒ

エルザだね。

オルトルウド

私と出會する此の今を

彼奴は呪ふ事になるのだよ。——彼方へ去つといで。
少しの間この場を外しておいでよ、さ。

フリイドリヒ

何故だい？

オルトルウド

彼女の相手は私さね、——お前さんにはあの武士よ。

(フリイドリヒは其處を去り、舞臺の後方に消える)

オルトルウド (今迄通りの身の位置恰好で高く嘆き訴へる表情)

エルザの姫！

エルザ (暫く黙つてゐてから)

誰だろ呼ぶのは？——なんてまあ此の夜中に

物凄く訴へる様に私の名が響いたのだから？

オルトルウド

エルザの姫！

あなた様には私の聲はそんなに分らないのでござりますか、

あなた様は此の一等ひどい不仕合せ者を、悲惨の極に突き入れて、
すつかり否定なさるお積りですか？

エルザ

オルトルウドさん、——あなたなの？ 不仕合せな女の方、何をあなたは
こゝでなさるの？

オルトルウド

……『不仕合せな女』ですわ、——

本當によく私の事を仰しやつたわねえ。

遠い寂しい森の中で靜かに平和に

其日を送つてゐた私が、何をば其處で

あなた様にしましたでせう、何を私がしましたでせう？

自分の家に長いことかぶさつてゐた不仕合せを

悦びもなくたゞ泣いてばかりゐました私が、——何をあなた様に

しましたでせう、何を私がしましたでせう？

エルザ

まあ、ひどいわ、何をあなたは私に責めるの？

ロオエングリン

あなたに苦しみを與へたのは私なの？

オルトルウド

あなた様のおんなに輕蔑なさるあの男が私を妻に選びましたといつて、その幸福をどうして實際あなた様が嫉みになりませうよ。

エルザ

まあ、大慈悲の神様。そんな事が私に何でせう？

オルトルウド

純潔なあなた様に罪を負はせるなんて、あの人はそら怖ろしい亂心に取りつかれたに相違ありませんの、——今は心も悔恨に裂けて破れてすたすたになり、激しい苛責に惱んで居るのでござります。

エルザ

まあ、嚴正な神様。

オルトルウド

あなた様は何てお仕合せでせうねえ。——

純潔な娛しい少しの間の悩みの後に、はや生涯の

微笑みかけて來るのを御覽になるのですもの。

私の不幸の陰氣な光があなた様の

お祝ひの中へ入り込まない様に、

あなた様は私を冥府の口へ追ひやつて、

御自身は清く安らかに私を去つてお行でにならねばなりませんわ。

エルザ (甚く感動する)

あゝ、私に斯様な幸福をお授け下さつた全能の神様、

私が今この自分の前にひれ伏して居ります不幸の人を

つき退ける様な事を致しますなら、私はあなた様の

諸々の御徳を誤つて讚美しました事になりますわ。

おお、決してさうでないわ。オルトルウドさん、待つてゐらつしやら。

ちかあなたを私の所へ入れてあげるわ。

(急いで局の内へ引き返す。オルトルウドは烈しい感激のまゝに階段より跳り上る)

オルトルウド

*冒贖された神々よ、私の復讐に手傳つて貰ひますぞ。

あなた様がたに加へた無禮を罰しておやりなさいませ。

あなた様がたの尊い神事に仕へまする私に力をお授け下さいませ。

背教者どもの無茶な亂心を打滅ぼして下さいませ。

ヲオダンの強者の神よ、御名をこそ我は呼ぶなれ。

フライアの崇高き神よ、我が願ひ、やよ、聞き給へ。

幸ひを我が偽りと作り事とに恵みたまへ。

復讐を我が巧妙に遂ぐるよう。

エルザ (まだ局の内において)

オルトルウドさん、何處なの？

(燈火を持った侍女二人を従へてエルザは局の下方の戸より出て来る)

*これは基督教の傳來によつて驅逐され排除された獨逸本來の神々(異教徒の神)、即ち次に出てゐる様なヲオダン(戰の神)やフライア(その要神)の事で基督教の唯一神によつて冒贖されてゐるといふのである。所謂悪方は獨逸に於てはいつも此等の原始的諸神を崇敬してゐるのである。基督教に歸依したものを背教者といふのも夫故である。

オルトルウド (エルザの前に低頭平身して)

此處でござりまするわ、お足許に。

エルザ (オルトルウドを見るや棟然として退りながら)

おや、まあ。そんな姿してゐらつしやるの？

いつも立派にし、やんとして居らつたの許り私の目には残つてるのに。

さうして私の前に平伏してらつしやいますのを見ますと、

私の心は息窒る様でございますわ。

お立ちなさいな。嘆願なんぞ。どうぞしないでゐて下さい。

あなたが私を憎んでゐらつたのは、私ゆるしてあげますわ。

私のためにあなたが苦しむ様になつたのも、

どうぞゆるして下さいまし、私願ふわ。

オルトルウド

そんなに御親切に仰しやつて下さいまして、

私ほんとに有難うございます。

エルザ

夜が明けてから私の良人きんごになります人に、
その廣い愛の心に訴へて私たのみますわ、
フリードリヒさんにも情けをかけて上げますよう。

オルトルウド

何とお禮を申上げたらいいか、私感謝に堪へませんわ。

エルザ

(ますます快活に昂奮しつゝ)

夜が明けたら直ぐ又お目にかゝりませうね、——
あなたも綺麗な服を着てお飾りをして
私と一緒に拜禮堂に行く事になさいまし、
そこで私あの私の騎士を待ちますのよ、

(得意さうに悦ぶ)

神の前で夫婦のかためをしますために。

オルトルウド

そんな御立派なお仕合せを私みたいに力のない
悲惨みじめなものが何うしてお祝ひ出来ますかしら。
たゞ私お情けうけてお側に居られます限り、
乞食としてもお仕へしたうござりますの。

(ますますエルザに近く進み寄り)

たゞ私に授かつてゐる力が一つありまして、
それは何物にも奪はれないで居りますわ、——
それで私は、あなた様のお命いのちを守りますわ、
悔いの災難などのない様に防ぎますわ。

エルザ

(無頓着に又やさしく)

そりやどんな事?

オルトルウド (強く)

あなたに警戒なさるよう申上げておきますわ、

(自ら制しつゝ)